川柳の雑誌

麻生路郎・主宰

大正十三年三月三日 第三種郵便物認可
昭和十七年三月一日發行 第十九卷第三號 (毎月一回一日發行)

全力で護れ
この空この國土

三月號

Pensoj flugas trans la land-limon

ニキビ

りとびきに

美顔水

の等虫京南・蚊・蚤
毒虫てカユいい時！

然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

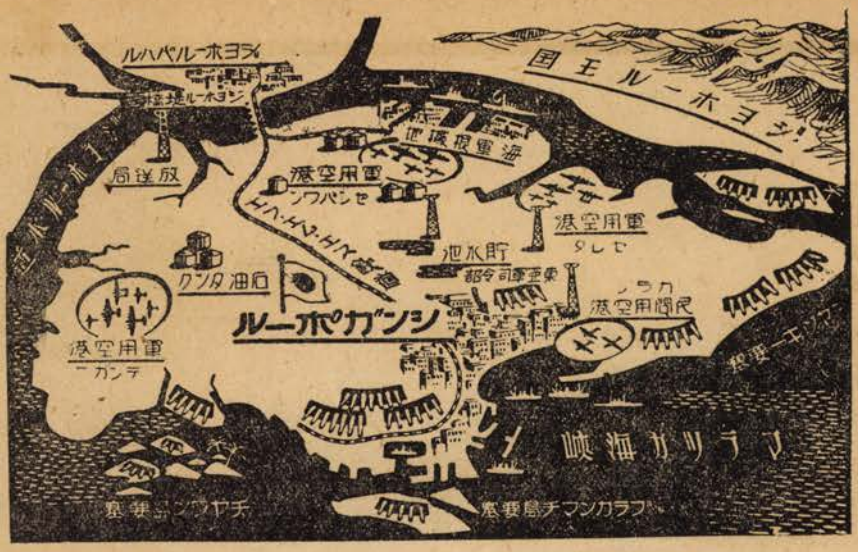
★ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧！ ゼヒお勧めしたい薬です！

是	吹	ニ
非	出	キ
此	物	ビ
藥	に	

東京・大阪

桃谷順天館

祝 新嘉坡陥落



二月十五日、新嘉坡陥落し、十七日に昭南島と改稱された

持駒を投げてシ港もこの通り　路郎
陥落にジョホール王も巾が利き　馥乃
朝禮にまづ陥落が先になり　綠雨
新嘉坡陥落風邪ひいたのが起きて來る　かほる
陥落に銃後一億みんな泣く　山雨樓
ただ祈る捷ちてなほわれら銃後　丹路
ジョホール橋もうなごやかな軍靴行く　鋭々
セツブクもなく落城のあつけなし　八歩
日の丸をありたけ立てろ勝ち祝　孤逢
ごらうじませ御自慢の獅子ひと潰れ　生々庵
昭南島もうCDも縮むのみ　曹天
百年の魔の腕もぎし大和魂　貴志子
この嬉しさ二合で祝へと仰せられ　自有浪
日章旗大東亞橋をまつしぐら　鮎美
チヤーチルの臍のありかが面白し　夕鐘
昭南と名もあらたまりとぶ螢　豆秋
大業進む昭南島を洗ふ波　水客
陥落へ二ヶ月ぶりの髭をそり　紫香
陥落のニュース一家で取りかこみ　潮花
日の丸へ昭南島の風となり　春巣
陥落を祖母へもきかす襖あけ　栞

英首相議會報告

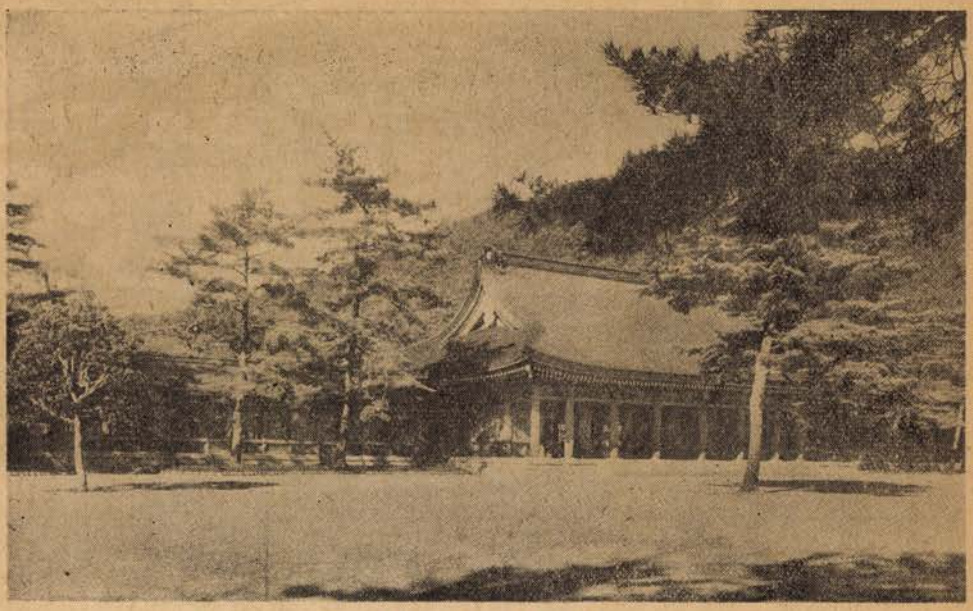
諦めの悪い繰ごとまだ續け　小松麗
シンガポール兩手をついて降るなり　瀟潮
チヤーチル給與かウフフと要塞砲を撫で　史路
ありがたく臨時ニュースに座りかへ　九天
七つの海の夢は崩れてシ港陥つ　夜王

川柳雜誌　三月號目次

表紙…（護れ大空）……一村巖
祝新嘉坡陥落……諸家…（一）
隨想・丹波の狐……小山文三…（八）
川柳寫眞（耕せ耕せ第二の國民）カメラ福井哲・句—諸家（一七）
其奥を弔ふ……須崎豆秋…（六）
武玉川四篇研究（二八）……梅本鹿山　森東魚…（一〇）
川柳二句（犬・ごりがん）……蛭子省二　笠原路生…（八）
初等川柳講座（二）……麻生路郎…（一八）
川柳・シナリオ・線畫……戸田孤逢…（二六）
吟行地調べ　大和篇（一）……麻生路郎…（一三）
川柳にうまを拾ふ……鈴木石鹿…（二二）
大東亞戰の句を語る……路郎・丹路・豆秋・某人・馥乃…（一三）
お隣組の名物婆さん……大山露斗…（一三）
川柳草津溫泉……北川春巣…（二三）
お隣組のための御座敷芝居　川柳劇　公園夜話（一場）……小畑自有浪　後藤田凡平畫…（一八）
西日本鐵道人川柳大會近づく……濱田久米雄…（二二）

★

近作柳樽……麻生路郎選…（二二）
川柳塔……麻生路郎選…（二四）
同舟近詠……諸家…（二七）
一路集　戰闘帽……市場没食子選…（二九）
腕……河野夜王選…（二九）
各地柳壇……（三二）
川協・柳界展望……（二八）　七號室雜記……（二九）
社關係の人々……（二六）
川柳書架（八一）……（二三）　飛燕往來……（二三）



橿原神宮

筆者の言葉

舊冬、吟行地調べ奈良篇の完結を見たので、本號から大和篇を發表する事とした。たま〳〵大英帝國の東亞侵略の牙城、シンガポールが陷落して一億國民の胸底に歡喜渦卷く際、肇國の聖地大和を川柳の上から紹介することは筆者の光榮とするところである。

吟行地調べ

大和篇（一）

麻生路郎

（一）橿原神宮

★官幣大社橿原神宮は奈良縣高市郡畝傍町（舊白橿村大字畝傍）にあつて、神武天皇と皇后媛蹈鞴五十鈴媛の二柱が祀られてゐる。

★その齋域は畝傍山の東南橿原の地で、神武天皇御在位七十六年の宮阯である。しかし年代が悠久なるため地形が變遷して、その阯が殆んど不明であつたが、明治の初年に有志等が、これを遺憾とし、或は史乘に徵し、或は口碑に照して、この地が宮阯であることを考證、その旨を當局に陳上したので吉井宮內次官の臨檢、次いで勅使西四辻侍從の御差遣となり、明治二十二年三月八日遂に御裁可確定、その地を宮內省に買收せられ更に廣く同志を糾合、同年五月三十日四十四名の連署で、この宮阯に神社を建設し、神武天皇と皇后媛蹈鞴五十鈴媛命の二柱の奉祀を請願した。同年七月二十三日朝廷から特に京都舊御所內の溫明殿並びに神嘉殿を下賜せられ、溫明殿を神殿に神嘉殿を拜殿として翌二十三年三月工事が竣成した。

（拜殿は後移建されて御饌殿となり今では神殿と共に國寶建造物である）

そして三月二十日、橿原神宮の宮號を賜はり、官幣大社に列せられ、四月二日に御靈代鎭座の御事があつた。前者は五間二面の入母屋檜素木造檜皮葺で、本殿に充てさせられ後者は七間四面の入母屋栂素木造檜皮葺で、最初は拜殿となつてゐたが昭和六年御饌殿が變更され、更に皇紀二千六百年（昭和十五年）に際し、宮域の大擴張並びに社殿の大增築が行はれ、又百二十萬建國奉仕隊員が全國及び海外から馳せ參じて、國民の心身錬成である橿原道場の建築と神域皇陵道の改修をした。

橿原神宮驛前の大參道正面には畝傍山を背景として橿原神宮の大標石柱と大鳥居が儼然と聳え、境內には淸淨の白砂を敷き詰め、塵一つとどめないので、おのづから襟を正さしめる。現境內は十一萬七千七百坪である。

★國民心身鍛錬の一施設として建設された橿原道場は下記の諸設備から成つてゐる。

（一）紫光館は建坪三九坪、運動場使用者の係員及び選手の休憩又は小人數の會議場として使用されてゐる。

（二）野外公堂は總面積二三四六坪中央地表の面積六〇〇坪、目的は相撲、柔道、劍道、庭球、籠球、拳闘等の運動競技の外に野外公演野外劇、野外映寫、野外音樂會等に使用。

（三）建國會館は講演會、協議會、映畫會、その他修養的集會に使用される。その他、武道（劍、柔、薙刀）の練習試合、又靜座道場としても使用される。建物は昭和御大禮の節の饗宴場を御下賜になつたもので、椅子を使用する時には一五二六人、椅子を用ひない時には二千人を收容することが出來る

（四）弓道場は建坪二二九坪ある。

（五）八紘寮は八棟の宿泊道場で、一棟一〇〇名を收容することが出來る。

（六）橿原文庫は古今內外の圖書及び肇國史に關する文獻並びに書籍を蒐集等の外、日本精神の涵養に資してゐる。

（七）大和國史館は國史參考を陳列皇國傳統の姿を識らし、肇國精神の涵養の資としてゐる。

（八）農園は五反五畝歩あつて神宮供饌の料に資してゐる。

★神武天皇は日向の狹野といふところで御生れになり、御幼名を狹野尊と申し、古事

記の傳によると若御毛沼尊とも豊御毛沼尊とも申し上げた御誕生の地と云はれてゐる宮崎縣西諸縣郡高原町字狭野の王子原には、その御阯が保存されてゐる。

★神武天皇の御父君は彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊と申され御母君はわたつみの神の女玉依姫命にわたらせられる。御兄弟は彦五瀨命、稲氷命、三毛入野命で、その次が狭野尊、即ち神武天皇であらせられる。

天皇は御年十五歳で皇太子に立たせられ、後に日向國の吾田邑の吾平津媛を妃となされ、日向の高千穗宮に御住ひになられ、手研耳命と申す皇子を儲けられた。

★神武天皇紀（日本書紀卷三）によると、天皇は神日本磐余彦天皇と申し上げる。この御稱號は大和畝傍に皇都を奠め給うた後に、地名の磐余をとつて稱されたものであり神武と申す漢風の御諡號は淡海三船が、勅を奉じて奈良時代の末頃に撰進したものと推定されるそうである。

★天皇は御年四十五歳の時御東征を企圖遊ばされ、諸皇兄及び御子と協議になり、甲寅歳十月五日、軍船を準備し、諸軍を指揮遊ばされて美美津港（宮崎縣兄湯郡美美津町）から東方に向つて御進發になつたのである。

大御船霧にかくるるヒつはえ　葭乃

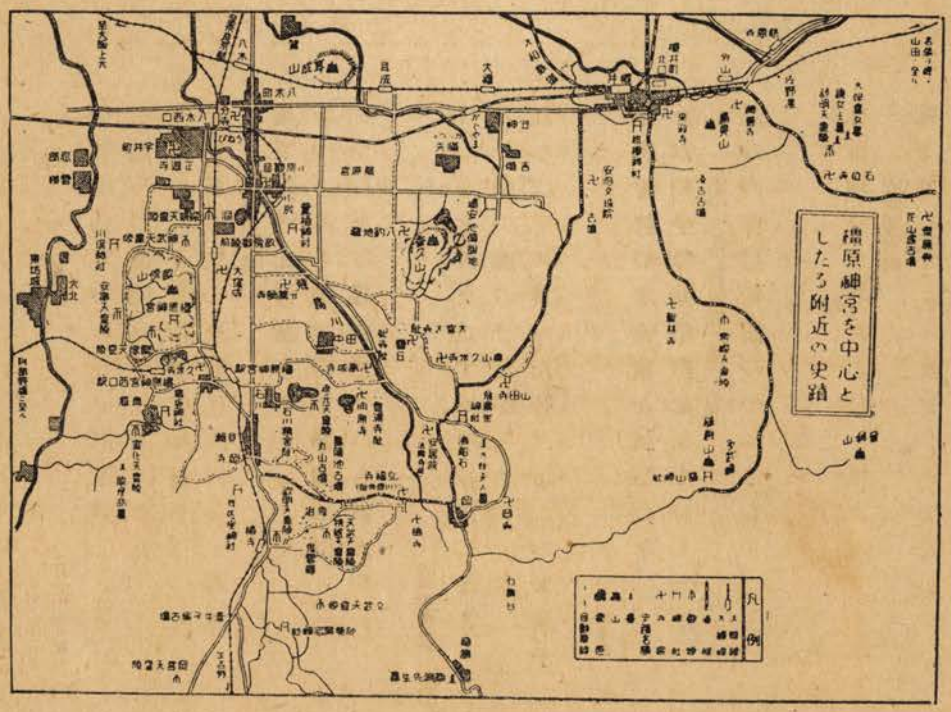
揚紙高の明日は天氣か遠見村　同

舟師泊り泊りに宮が建ち　孤蓬

★天皇は大和平定の後、己未年の三月、橿原宮を御造營になり、御即位の前年、庚申年の八月正妃として大國主命の御子事代主神の御女媛蹈鞴五十鈴媛命を納れ給うた。そして神八井耳命、神渟名川耳命の皇子を儲けられてゐる。古事記によると日子八井命、神八井耳命、神沼河耳命の三柱御誕生となつてゐる。

★神武天皇は寶算五十二の御年、日本書紀によれば紀元元年辛酉春正月庚辰朔に橿原の宮で人皇第一代の天皇として御即位の大典を行はせられた。この日が太陽暦に換算すると二月十一日である。紀元節といふ制は明治天皇が維新の大業御完成あらせられ諸の制度を復古し給うて、永遠に神武天皇の御聖德を後代に傳へようとの叡慮から、明治六年の一月に改暦となつたのを機會とせられ、三月七日に、神武天皇橿原宮御即位の日を紀元節と稱する旨を仰出され、七月二日附で、二月十一日を祝祭日とする旨の公布をされたのである。

★天皇は御在位七十六年紀元七十六年の三月十一日（陽暦の四月三日）に御壽百二十七歳で橿原宮に崩御あそばされたが、畝傍山の東北白檮尾の御陵所に御斂葬の御事があつたのは、その翌年の陰暦九月十二日であつた。畝傍町大字大久保の御靈域を今では神武天皇畝傍山東北陵と申し上げる。御陵は櫻井線畝傍驛から南へ十七町でその前に關急線の神武御陵前停留所がある。



御歳百二十七歳と宮司の書　山雨樓

神武天皇祭は、明治四年の御布告で、天皇崩御の三月十一日を全國一般の祭日と定められたが、同六年に太陽暦の四月三日に改められたのである。

★御事蹟謹詠の川柳では

香具山は平瓮嚴瓮の原産地　葭乃

お手討になると長髓彦知らず　同

手におへぬ戸畔を討ちうち御進軍　同

兄猾は吊天井にほくそ笑み　路郎

長髓彦てつきり賢と思ひこみ　同

頭八咫烏空の護りの元祖なり　同

金の鶏人間共は眼があけず　孤蓬

川柳塔

=路郎選=

ハワイ海戰

遠吠へ魚雷一發火の如し
宿命にしては儚い眞珠灣

張家口　岩崎柳路

マレー攻略

ジャングルで出會へばすぐに手を揚げる

聚張より香港司令に御轉戰の酒井閣下へ

覆面の將軍樣へ膝を打ち
友軍機無事に還つた星月夜

大阪府高石町　戸田孤篷

應召萬歳權利も義務も忘れて居
猿智慧が猿を先祖と思ひこみ
病歴を語る疊が焦げてゐる
赤道を白鉢卷のまゝで越し

大阪　中島生々庵

點數だヒスも心してヒスる也
切符制もつたいないが着せて燒き

お便所も列べ列べの寒い驛

或人に與ふ

どぶ鼠まだこの時局わからぬか

兵庫縣川西町　戸倉普天

榮轉の嬉しいけれど借家難
引越しの蒲團の中に米もあり
旦那ハンも見附けて鰯買ヤはつた
大旦那の旅で見附けたパンが着き

衣料切符制

靴下の穴此何點をどうしよう
おつさんも戰闘帽で警備に出
どうしたら暮せますかと新世帶

大阪府高石町　米本貴志子

日の丸を書き足す地圖の忙しなさ
呑む顏へ虎の子ながらサア一本
ならばずに買へた筈だよこのお菓子

兵庫縣　水谷鮎美

半皮を打つて靴屋と話しこみ
わが椅子の修繕釘を強く打ち

里十九氏亡母堂靈に捧ぐ

島の内釋尼精觀の燈がともり

大阪　橋本綠雨

休閑地春だ春だと種を播き

衣料切符制

靴下はつぎ〳〵父はこれで良し
日章旗を持たせてくれと負傷兵
ジャングルで音だけを聞く友軍機
壁新聞の漫畫子どもに教へられ

この寒いのに「もーいゝかい」「まーだだよ」　兵庫縣　奥村丹路

あたゝかくなればなれば似た夫婦

子を抱きまだ三月は寒からう

子をもうけむしろ孤獨が身をまとひ

ともだちの訪れおそき門を掃く

冬時雨あゝ風流を忘れぬし

ほのくらい部屋に日本の母は座し

何を喰ふ鳩か本願寺に遊ぶ　大阪　浪玲之介

住友も二合三勺炊く煙

軍服の姿見せたい人があり　大阪　津路紅多呂

銃を持つ掌に寒風はいとひなく

大東亞戰の眞只中へ召されたり

美術館ひつそりかんとしてよろし　大阪　須崎豆秋

國寶のみほとけ耳が一つ無い

觀世音指の先までうつくしく　野朶共販

大根も月給取の聲で賣り

ゼントルマンお臺所のはなしなど

からださへあれば仲仕にもなるが　ハイフル　宮岡白峯

三ケ日今年も銃を持つてゐた

並足の靴も凍れり午前五時

大阪の城に似てゐるちぎれ雲

咳一ツ歩哨防寒服へせり

慰問品明日の奥様とも知らず

日本刀四五寸拔いてゐる俺だ

太平洋俺は防寒服見つめ　松本　石曾根民郎

ひとしく丙種も兵籍にあり

丙種の身いまぞ冬木と競ひ佇つ

冬の蠅哀しき鼻と見屆けし

火箸もつ手も冷やかに師の計きく　大阪　正本水客

隱忍を與し易しとみし波濤

局面展開一億の眼はうなづけり

一家つゝがなく人形ケースの埃

腰のひくい組長さんに恐縮し

木炭車故障チラ〳〵雪になり　豐中　黑川紫香

雪つけて四五人コーヒ飲みに來る

未亡人會社勤めになれてくる

英靈へ荷馬車も少し止るなり

日曜日父のマスクに子のマスク　大阪　丸尾潮花

美粧院義理の親娘と云ふ若さ

下積の愚痴だ考へるのはよそふ

好きでない男が呉れた五圓札

圍はれて時局の軒にせまく住み

送料は私がします慰問品　尾崎　酒井斗風

粉藥をこぼした膳がさびしくて

國歌吹奏長男素足のまゝで立ち

還る人征く人がある隣組
箒持つ妻に早春ふと感じ

大阪　北川春巣

怒つてるやうに植木屋枝を剪り
轉地した或日は嶌を見て暮し
南國へ來て情熱を見込まれる

我兒初誕生を迎ぶ

戰捷國の子だ萬歲をもうおぼえ
買溜めのある間後悔續くなり
歸還八百屋舊體制の頃の世辭

村治紫津君の榮轉を祝ひて

孝行の出來る轉任美まれ

大阪　押谷たけを

南進論マレイ語入門から始め
薄給へ一層氣樂な切符制
君の腕にはもう誰も疑はず

大阪　西尾栞

四分ノ一八分ノ一に切るのを子等みつめ
殘置燈密柑の皮を照らしてゐ
荷物嫌ひ酒の瓶なら提げてゆく
暇で暇でと保險屋頭から言はれ
久闊は鯨の肉と酒二合
もう一度來る氣の外交笑つとき
一列の中ではからず悔み受け

下關　櫻川不水

明日は又僕の血となる僕の酒
頑張つて見れば貧乏面白し
十二月八日それから地圖が好き
舌計り嚙むチヤーチルへテキの味
食パンとミルクが好きで蒲柳型

廣島　濱田久米雄

捨石となる職域へ氣が揃ひ
子の代を考へてゐる奉戴日
火の玉の意氣霜を踏み〳〵

大阪　魚住滿潮

豚のゐる風景春の軍事便
チヤーチルと子供の口のはにかゝり
マレー戰線三段跳で敵は逃げ
南へ南へ背の子供も連れて行こ
鍛入に來てモンペイを縫はされる
金持の家の高さへ水をかけ
皮算用廻轉椅子が廻るなり
隣組邪魔になるほど小火へ出る
一圓の獻金朝の霜を踏み

大阪　中内翠芳

節米へ長男次男喰ひあさり
寒風の川曳船が一つ行き
初詣り燒鳥の香もブント來ず
備へある國有難やぐつすり寢
露天風呂戰友やつぱり唄が好き
ちび下駄をはいて銃後の役を持ち

佛印　大森風來子

今日の日記にもバナナのしみがつき
何氣なく見たローマ字が日本語

佛印

遠吠えと歩哨の劍が光るだけ
安南娘(スコ)おけさ節でも歌ひそう
季節雨(ル)が來ても洗濯やめぬなり

日・佛共同防衛

スパイすることもされてることも知り

古本屋馬來語辭典の値を變へる　岡山　鈴木九坡

不自由もなんの勝閧待つだけさ

布衣粗食共に戰ふ姿です

一列へパン屋冷めたく扉を閉ざし　大阪　夷一笑

我のみか山川草木春を待つ

いゝことが今年はあると信じたし

マスクして一分のすきもない女

荷かざりもせずにこいさん嫁くそうな

雨合羽持つて女の一人旅

見送りの一人さつまの守をきめ

子の菓子を殺生なことしなはんな　大津　鈴木石鹿

占領をされたと知らず着陸し

焦土戰術どうせ祖國の土地じやなし

死守せよもいゝが避難の船並ぶ

新嘉坡陷落迫まる

侵略史こゝに大きなピリオッド

隣組裏の土塀を切り開き

國土防衛莚火叩砂バケツ

隣組おかずを持つて見舞に來　今治　月原宵明

配給の列に女房の顔がみえ

ショーウインド昔繼しい覗きやう

長女一〇〇日

一姫へ夕餉遅れること多き

戰線回顧（二句）

泥寧に闇迫り來て廢馬臥す

顏洗ふなど贅澤なものゝうち　大牟田　高田拘逸

アンノザナワリ殉死の兄へ義理を立て

（註、アンノザナワリとは亡兄の嫁を弟が受繼ぐの意）

報國隊地下千尺もたぢろがず

出稼ぎの鑛山で拾つた後家と逃げ

長屋でも九百點の世帶が居　下關　田弘半休

腕まくり卷く繃帶は國のため

八十點結構風邪はひかぬなり

軍屬の腰重そうな日本刀　西宮　谷口綠葉

考へておくと斷ればいゝものを

徵生える間もなく餅は燒かれたり

おゝ寒いビール只今ございます

一本へ嫌な板場に世辭も言ひ

半官や半民ではね水臭い　尼崎　小林文月

一月四日社內轉勤（三句）

盲判捺す程の身に未だなれず

自轉車の前輪のゆらぐ氣持にて

何となく他人の樣な名刺出來　伊丹　酒井美知夫

セルフタイマー女房子供を連れて出る

一列の中で男は馬鹿に見え

木炭車よつぽど坂がきらひなり

疊替へ長屋の人をぬくもらせ

ひくい鼻しかとマスクでおさへて居　尼崎　飯尾寄與史

花嫁が衣料切符で出來上り

岡村和郎君入院

戰爭の事も忘れて腦を病み　大阪　武部香林坊

奧樣は切符も不用ぬ程に持ち

めしや點描

心臟の弱さがめしを喰ひ外し

隣組茶殼仲よく干してあり

神まいりぐらいで濟まぬ此の戰果　布施　上田翠光

經濟道義強調週間

儲けると云ふは昔の語り草

川柳二句

笠原路生

犬

ツルゲエネフの「散文詩」を獨逸語譯のレクラム版で初めて讀んだのは、私の高等學校時代であつた。爾來この手垢に汚れたレクラム本は私の愛讀書の一つであつて、いつも手近にある。ツルゲエネフの「散文詩」は詩の衣裳をまとうた哲學であると言はれてゐる。この本のうちで今にいたるまで心をひかれるのは「犬」と云ふ短かい文章であるその內容は次のやうなものである。

部屋の中には犬と私がゐる……戶外は恐ろしい嵐だ。犬はまともに私の顏を見る。私もまた犬の顏を見る。犬は何か言ひたげにしてゐる。——私は彼の心を知つてゐる。互に見交す二つの生物はもう獸と人間ではない。互にぢつと見つめてゐる目には差別はない。獸類にも人間にも同じ生命が互に寄り添うてゐるのだ。

私はいつか川柳の句會に出席して、このツルゲネエフの「犬」を次のやうに飜案したことがある。

犬の目を見詰めてゐれば淋しいぞ

數年前のことだ。

ごりがん

丹波の狐（一）

隨想

小山文三

○

深尾須磨子女史は筆者の鄉里と凡三里を隔てた同じ丹波の出身であつて次の樣に述べて居らるゝ

「丹波の山には狐のすきと呼ばれてゐる美しい蘇苔類が土の上や岩の上に這つて居ります……それから狐のヘンダレと云ふ眞黑な木の實が此山にも實つて居ります。

チョツト霧雨が降ると、ソラ狐の嫁入りと噺す、川ぶちに咲いてゐる釣鐘草の花も丹波の子供に言はせると狐の灯燈です、すべて狐、また狐」

○

筆者の鄉土には次の樣な俗謠がある

あの子、どこの子、丹波の筍、煮ても燒いても食はれん筍

あの子どこの子丹波の啞の子、啞の錢盜んで鯛買うて喰ふた

今は昔、筆者の學童だつた頃には近鄉の村の見知らぬ子が通りかゝると、腕白盛りの村の子達ちは其後ろ姿を見送りつゝ此俗謠を高らかに唄つて口ぎたなく罵つたものである。

そも〳〵此俗謠は、丹波の子供達ちが、煮ても燒いても手におへぬ腕白が多いのを諷刺した偶意に外ならないが、其煮ても、燒いても手におへない處に狐の性癖と似通ふ處があるのであらう。

○

日露戰爭前後の頃、筆者は二里半に餘るK町の中學校に雨の日風の日の厭ひなく、徒歩で通つたのである。

當時質實剛健を校是とした此中學には自轉車に因る通學なぞ許されよう筈もなかつたのであつた。

斯くて十二三歲の少年が朝まだほの暗い、恐ろしい山陰の道を獨りで通ふのであるから夜明けの遲い冬の日なぞには、母が提灯をつけて凡半里斗りもよく送つて呉れた事を今でも思ひ出されるのである

其頃の或冬の朝、少し早目に我家を出た筆者は母に送られて、さる川ぶちに取り懸ると突如、グワイ〳〵と凄じい鳴き聲を投げつけて我行く手を横切る狐に遭遇したのであつた。只さへ暗い道に、おぢけづいて駈け出す斗りに學校に急いでゐる自分と之れを送つてくれる母の驚きは一入で一所懸命手を組んで走つたのであつたが、狐は尙もグワイ〳〵と唸りながら、前になり後ろにつけて來るので、到頭母も、一里以上の道を送つて來て、全く夜のあけてしまつた、人通りのある頃漸く引返された事がある。

○

同じ頃S君は同じ中學の劍

方言とか訛言とか云ふものは厄介で、理解するに困難なものだ。上方の言葉に「ごりがん」と云ふ方言がある。上方と云ふても大阪だけのやうで、京都ではこの言葉は通用しない。大阪土着の人で四十歳以上の人では「ごりがん」と云へば何らの説明なしによく分かるが、四十歳以下の人では大阪生れの人でも分らない方が多いだらう。「彼奴はごりがんだ」とか、「またごりがん言ふてはる」などと用ゐられる言葉だ。「ごりがん」と云ふ言葉を知らない人には上司小劍の「ごりがん」と云ふ小説を讀むといい。この小説の冒頭には「ごりがん」を次のやうに述べてゐる「ごりがんとは先づ、駄々ツ兒六分に變人二分に高慢二分と、それだけよく調合して出來上つたかみがたの方言である」

この説明でも「ごりがん」のもつ廣い内容は充分ではないやうに思はれる。私は高慢のかわりに「强よがり」を入れて見たらばと考へたこともある。

結局「ごりがん」は「ごりがん」であつて、大阪の町人によつて傳統された意味のふかい形容詞又は副詞である。

一とき方言を入れた川柳を作つたことがあつた。

ごりがんであると彼奴は持つてゐる

この句は誰れにでも分る句ではない。（終）

Sata Special Klinik
呼吸器病科
診療 毎午前
佐多愛彦 電北38
加藤謙一
螺良四郎 電尼崎1151
内科
市電堂島中町停留所北辻西入
佐多醫院
大阪堂島北町 電北八二八四

道部の寒稽古に毎朝四時頃から一里半餘の道を三十日間も通ひつゞけたのであつたが、或雪の朝提灯片手に竹刀をかついで誰れ一人通つてゐない尺餘の雪道をイモリ阪に差し掛つた處、突然餓えたる狐に襲はれて、其提灯の火を奪はれてしまつたが、腕に覺えのある同君は其竹刀で立ち向つて狐を撃退したと云ふ武勇傳さへあるのである。

○

狐は穴居する動物で、やすやすと村里近くに出沒するものではないが、秋の末から冬に掛けて、奥山に食ふ可きものが無くなると、村里近くの田や畑を襲ふのである。就中鷄舎を襲ふに妙を得てゐて夜陰に乘じて鷄小屋の床下を掘り廻しこゝから侵入して所謂鷄目の夜盲に乘じて鷄を食ひ盡し羽毛、翼、趾、なぞを殘して悠々引き下るのである。慣れた養鷄主は其鷄の食はれ方と床下の掘り跡を見て、ヤレ山犬だ、イヤ野猫だ乃至は慥に狐の襲撃だと、間違ひのない鑑定を下すのである。

さる古老の話によるに鷄舎を襲ふ狐は決して其村の山に住むものでなく必ず遠い隣り村の山に住むものだと言ふ事である。

狐は其性狡猾だから其村の鷄舎なんか襲ふ程の馬鹿でないと言ふのが此考證の論據であるらしい。

○

月光凄く冴え渡りて、未だ宵ながらの霜柱嚴冬の夜に圍爐裏を圍んで、甘酒なぞ沸かしつゝ、團欒の一時を送る時どこともなく遠くの方でコンコン、コンと鳴く狐の聲を聞いては、そゞろに戸外の寒天の膚を刺す寒さを覺えるものであつた。

由來狐は得意の時にはコンコンコンコンと靜かに鳴くので何となく物靜かさを感ずるが憤怒したり驚ろいたりすると、口を大きく開いてグワイ〳〵と凄い唸り聲を出すのであつて、只に狡猾なるのみならず、弱味につけ込む事を知つて往々人をも襲ふし常に一種の胴喝をもやるから誠にうるさいのである。

其奥を弔ふ

須崎豆秋

水道も凍てついた昨十二日の晩に、其奥は勤め先から歸るなり錢湯へとび込んで來たが急に胸苦るしくなつて來たので、奥さんに介抱せられながらヤッと午前一時頃寢に就いた。そして今朝奥さんが起して見たが――返事が無い、死んでゐた――といふあつけなさだつた。北枕のヴェールをとつて見ると未だ湯上りのさくら色がほんのりと殘つてゐるやうで「ヤー豆秋君」と蘇がへつて來るやうな氣がして仕方が無い。

其奥があのいきさつで不朽洞會員を辭めてからも先生を慕ふ心根はいぢらしかつた。そして又先生のあたたかいお心がよく通じてゐただけになほ辛らかつた。而し今こそ先生の短冊「さけとろり〳〵大空のこゝろかも」の下で其奥はやすらかなねむりについてゐるのである。

艸樂さん『そんなくすりが効くものか』
禿山の膝の短かい坐りやう
艸樂

禿山の名において其奥は、いつまでも〳〵愛すべき思ひ出となるであろう。

南洋で十二年も暮して來た其奥にせめてシンガポール陷落のニュースを聞かせたかつた、瞑せよ其奥。（二月十三日夜）

武玉川四編研究（二八）

梅本塵山
森東魚
蛭子省二

(639) **鰹賣きのふハ南けふハ北**

省二＝高價なものであつた。昨日は南、今日は北と賣場を替えねばならぬ。

東魚＝先づ鎌倉から駈けつけて、近い江戸の南の方から賣り初めると云ふ氣分が、ほのかにあるのであらう。（單にあちらこちらと云ふ意に句面はとるべきであらうが）。

塵山＝古俳句の「稻妻やきのふは東今日は西」の飜案である。

(640) **奥と表と違ふ物の名**

東魚＝屋敷の表と局などの居る奥とは、日常の品の名も呼びやうが違ふと云ふので、例へば局達の奥の言葉では葱を「ひともじ」と云ふ工合に。（かゝる句は前句の模樣で輕い妙句である場合が多い）。

塵山＝前解の如くで面白い句である。

省二＝獨立句としては、だゝそれ丈けの事の句。

(641) **魂かないと此世ハ面白し**

東魚＝眞面目に反省する魂もなくなれば、浮いた〳〵で面白い限りであらうのに、なまじ理性があるのでと自ら苦笑した氣分であらう。

塵山＝魂が有頂天外に飛去つたならば、面白いに相違なからう。

省二＝地獄極樂などを思つてゐたら、此世から苦勞だらう。魂などが何んだと思つたら、此世に處するに氣輕だ。私などは魂が腐つて居るから、頭痾に惱み通しても此世は面白い。

(642) **箕の輪にはかの行ぬ煩**

省二＝乳が黑くなつて箕輪に蟄居させたものでもある。吉原大籬の遊女の出養地。

東魚＝前說の如くであらう。

塵山＝昔の癆咳で、今の肺病ではなからう歟。

省二＝そんな場合もあつたであらう。

(643) **指を切らせて近い正月**

省二＝指を切るのも苦肉の計、暮から正月を無事通りぬける妙策。

東魚＝「切らせて」であるから、客の方を詠んだのであらう。彼の女が愈々自分獨占めになりさうな想像をして、正月遲しと待つ心持ちであらう。

塵山＝前解の如くであると、正月を待つ意が不明のやうである。

(644) **むす子をたます伊勢の濱荻**

東魚＝難波の芦も同じことなのだが、處が變れば又何か珍らしいやうに、外の場所の女をすゝめ込みでもする場合でないかと思ふ。

塵山＝伊勢講の先達が、青年を惡所に誘引するので、坐五の「濱荻」に意義はないものと思ふ。

省二＝そのへんであらうと思ふ。

(645) **蚊柱に坐頭ハひとり卷込れ**

東魚＝夕暮れの蚊柱の立つ中を避けもやらず、つくねんと取り殘されたやうに、坐頭が座つてゐるのであらう。盲人のあはれさが思はれる。

塵山＝陋屋の光景が能く現はれて居る。

省二＝此句の場合、「ひとり」は說明辭句ではない。感じが出る。

(646) **一寒とげて扶持に成聲**

東魚＝一寒の間の寒聲修行をとげた謠の若師匠でもあらうか。愈々殿の御對手になれるやうになつたと云ふのであらう。

塵山＝劍道かと思つたが、「成る聲」とあるから、謠か皷の師匠であらう。

省二＝謠の師と思ふ。

不憍不崩 寛延末秋改印

(647) **おもひ出してハ動くシテツレ**

省二＝能のシテやツレの動作にはかく感じさせられるものがある。舞と違ふところ。

東魚＝思出したやうにと云ふ穿ちである。

塵山＝悠揚として、更に迫らぬ態。

(648) **奴のゆく衛　水の行末**

省二＝奴と云へば、町奴、武家の奉公人、ある種の女性など指すが、「水の行末」といふ言葉からは、女の身の流れを詠むだものかと思ふ。勿論小者にでも通ずる

東魚＝武家の奉公人、身分輕き小者とみてよろしからう。

塵山＝前說の如く、小者に相違ない。

(649) **十月歩行婆々の片意地**

省二＝十月上亥から、炬燵を開く寒さに入るのに、お婆さん頻りに出歩行き廻るのは、何んだか片意地氣味がする。十月は佛事の多い月である。（堅法華などいふ片意地であらうか）

東魚＝法華信者の婆々との氣がする。

塵山＝淨土宗の十夜念佛とも聽取れる。又片意地とあるから、日蓮宗

の會式とも思はれる。

(650) **聖にハ隠す辛崎の松**

東魚＝目出度い夫婦松、相生の松ならよいが、辛崎のは一ツ松であるから――と云ふ意であらう。

塵山＝孤獨の松では、めでたく無い。

省二＝前句に響をもつ。「隠す」などの用語からも。

(651) **きつと居ツて鼻紙を折**

東魚＝何か、しかつめらしく申陳べ了つた後、鼻紙で口邊でも一と拭ひして、又懐中する場合などが想像される。

塵山＝伯父御の異見が始まる態でもある歟。

省二＝鼻紙を折るのが、前か後かは場合による。これも前句が欲しい。「きつと」を一層明瞭にする爲にも。

(652) **ほた餅二百一世一代**

東魚＝ぼた餅の大振舞、法事か何かであらうか。――或は醜い飯盛を旅の憂さ晴しに、一世一代と物好きをしてみた場合か。

塵山＝昔の飯盛の揚代は、錢二百文が通り相場のやうであつたから、それに相違ないと思ふ。

省二＝二百の牡丹餅と云ふと、數をきつた事が一寸説明しにくい。飯盛の句には「二百」なる言葉は、度々用ひられて居る。多分飯盛吟であらう。

(653) **肴を買に這入吉原**

省二＝元吉原は自給自足的に廓内に諸商店があつたらしい。それで他から肴を買ひに這入つたのであらう。特に「肴を」としたのは前句事情ならん。

東魚＝廓内で賣る出來合ひの肴を近所のものが買ひに大門を入る。遊びと違ふと云ふ處に、格別の興趣を感じるわけである。

塵山＝菓子とか賣藥とかならば、吉原廓内に有名のものが有つたけれ共、肴といふのは何とも解し難い。

(654) **定木に成ルハよつほとな人**

省二＝「定木に成る」とは、規則正しい行動をする人、即ち人の手本となる人。さういふ人は稀である。

東魚＝前解の如くと思ふ。

塵山＝世人の師表となる可き者といふ意。

(655) **熟過て恐しく成る泊客**

省二＝親切すぎて氣味悪く、泊客が感ずる。さてその場合は。

東魚＝旅籠の泊り客か。旅籠代の程もと、却て無氣味になるのであらうか。

塵山＝温泉の浴客が、餘りに熱度の高いのに恐れたのではない歟。草津温泉などは其一例である。

(656) **中を買たき買水の慾**

省二＝水賣の桶の中頃なれば、汚れてゐない。ごみなども無いとの慾。

東魚＝上はどうやら、ごみがありさうな氣のするのも、人情である。

塵山＝「中」は水桶の中部といふ意であらうが、少し言ひ足らぬやうに思ふ。

(657) **置所なき暮の大名**

東魚＝何處へやつても邪魔で、暮のせわしさの助にはならぬだらう――大名なんと云ふものは、との諸諧味であると思ふ。

塵山＝床の間の置物にもならぬ。

省二＝私の境涯を詠むと、「置所なき暮の喘息」となる。

武玉川四篇研究正誤表（二一七號）

（頁）	（段）	（行）	（誤）	（正）
四	四	七	其の蛙に	夏

戦線の將士へ
白衣の勇士へ
慰問品を
慰問袋
慰問品賣場　一階
實用向百貨店
松坂屋
大阪・日本橋

樽柳作近

選郎路

日本髪氣にしてをれぬ「天津風」　神戸　平川　久枝
寄宿舍の炬燵靴下つぐところ　同　同
國策に副へと緣談持つて來る　同　同
廢品厚生妻の頭腦を見なほしぬ　同　同
染替は零點こんなに資源あり　同　同
人と馬歩調合はせて歸るなり　大阪　富岡　巨人
藝術寫眞煙草一本　同　同
貸間あり軍需工なら貸しませう　同　同
オギヤーと生れりや百枚當るなり　同　同
自爆みな天皇陛下萬歲と　同　同
マスクかけ眼鏡もかけてスパイ　奈良縣王寺町　森田カズヱ
電話ロマスクの儘の聲ときゝ　同　同
旅役者百日咳の兒を背負ひ　同　同
黑繻子の襟汚れてる旅役者　同　同
進んでる時計と知つて立話　同　同
姉の机の若き兵が訪れる旗日　大牟田　松島　波人
支那ズボンどちら向いても呑氣さう　同　同
母と子に白衣も席を讓る人　同　同
その中の眼鏡をかけたのが將校　同　同
計量器跳る翼贊美人型　同　同
決然と起てばすなはち三・三・五　姫路　小川靜觀堂
持てるもの次々捨てて逃げまはり　同　同
獅々吼ついに一孤島と成つちまひ　同　同
行列は行列なれどお燒香　同　同
經濟市況聞き手は奥の隱居なり　岡山　岡田　笛六
股引が嫌ひで息子歌を詠み　同　同
あの時のヘマを便所で合點し　同　同
朝歸り時計を卷いて正氣づき　同　同
枯れすゝき搖れてゐるより仕方なし　和歌山　田島　破皷
コスモスの身の振り方をつけた霜　同　同
波止場の灯椰子の匂ひの船を待ち　同　同
感傷のかけら明治の軍歌集　同　同
結綿とパアマが竝ぶ初詣り　尼崎　長谷川三司
先生は免稅點で醉つて居る　同　同
坊ン〳〵に育つて馬の轡取り　同　同
滑るのか轉ぶかスキーだけは持ち　同　同
直角に歩いて都會もどりなり　岡山　佐伯　鷄城

西日本鐵道人 川柳大會近づく

三月十四日に廣島市の廣島鐵道局倶樂部で第四回西日本鐵道人川柳大會が開催されることとなつた。同じ趣味の同じ職業を持つた人が、年に一回各地から集つて句會を開き、親睦を圖らうではないかといふことになつて、昭和十三年三月二十五日に第一回を尾道市の驛前松風館で開催、麻生路郎先生の御出席を願ひ、川柳人協會後援のもとに、三十四名といふ參會者であつて盛會を極めた。そして次の年は下關鐵道倶樂部で五十餘名、昨年は大鐵倶樂部で六十名。路郎先生を始め東京の山雨樓氏の御出席があつて、大會は年と共に盛大になつてゐる。今、過古三回の大會を想ひ出して見ると、その思ひ出はどれもこれもなつかしいものばかりである。そして早くも第四回を迎へやうとしてゐるのである。大體鐵道人と限定してゐるので、綠雨氏の大阪市電、鮎美氏の阪神電鐵、紫香氏の阪急電鐵、五健氏の伊豫電鐵を含んでゐるのは當然のことであるが、本年はもう一歩進めて、鐵道に關係ある人は誰でも出席して欲しいと思つてゐる。路郎先生も久方振りに廣島の土地を踏まれるし、「川柳と地方文化」といふ演題でお話を願ふことになつてゐる。兼題は「搭乘」——路郎師選。「日本刀」——五健選。

カタムケ積御斷りとヒョコ御渡滿　同
紙芝居 暮れよい町として去りぬ　同
產んだ聲 今日の役目はすんだ聲　同　秋月　宏方
脇息は先代さまも知つて居り　和歌山
一月十日敵潛水艦我病院船哈爾濱丸撃沈
燒けくそになつて赤子の手をもねぢ　同
子澤山 まだこの外におなかの子　同
チケツトも出さず火葬場燒いてくれ　同
衣料切符 內緒の着物 もう出來ず　愛媛縣　米澤　曉明
配給は人並貯金コンマ以下　同
昇給の音快しホツチキス　同
座蒲團へ坐らぬ譯はおん願ひ　同
この方がよろしおまんが切符制　大阪　新川　博也
大阪の煙病院からも出て　同
看板の日本趣味はよく目立ち　同
當つたへ三等局の目が揃ひ　同
買溜の顏へまぶしく陽が當り　東京　岡部　士節
東京生活過去も未來も考へず　同
關西に住めば懷古に生き給へ　同
正月を裸で祝ふバンコツク　同
白足袋へ聲まで變へる女の子　大阪　中西　彌生
配給へ今日は大根の隣組　同
ハンケチも忘れられない切符制　同
切符制母の苦勞が一つふえ　同
辨當の溫み轉業恙なし　松江　本庄　快哉
偉人傳 讀む子に用を云ひつける　同
終點で車掌は横になりたさう　同
勝閱がすんで戰友さがすなり　同
いゝ子でゝへあれば恙がなきものを　大阪　橋本美奈子
珍妙な料理說明付で喰べ　同
その奧も齒醫者は一寸ふれて見る　同

トレモロで二軒三軒 ビール呑む　大阪　野元　吐空
股火鉢して調停へ判事出る　同
外科內科齒科まで友の有難さ　同
生還を期せず一機二機又一機　朝鮮　弘津　柳慶
一機まだ還らず飛行場暮れて　同
同胞の救出ニュースへ泣けて來る　同
高砂や獨身稅は今宵まで　大阪　平井　流舟
やつたなと衣料切符へ驚かず　同
宿替に獻納品を見つけ出し　同
基地作る職域夜も晝もなし　大阪　山本　葉光
大本營發表へ貯金して應へ　同
從軍記原稿用紙の砂を吹く　同
宿替を一月延ばす子の入試　大阪　岩本葉知朗
郵便屋幸と不幸を一つかみ　同
上京の父は暗さになれた足　同
ウインドに未だ無駄を見る春の柄　欅中　高山　武士
不縫綴をマスクに隱す派手な柄　同
征けぬ身がポマード等を匂はせる　同
英軍の彈丸・ガソリン頂戴する
空襲は貰つた彈丸も返しとき　愛媛縣　岡田　香桐
英米會談始まる
猫に鈴付ける鼠の智慧に似る　同
マニラ陷落
もう逃げる場所も少い米比軍　同
ルーズヴエルトラジオを聞くなと言へ　香川縣　早馬　淸富
氣に入つた寫眞と言ふは似て居ら　同
切符制貧乏人の味方する　同
おもわくが外れた將へ長沙陷ち　神戸　湯淺小城子
華府會議
敗戰へお互樣の顏がより　同
完勝へ此の軍事費にたじろがず　同
働らける明日の嬉しさ抱いて寢る　丸亀　馬場　浪二
皆勤へ喰べてゆかれる音を立て　同

「橋つ腹」「某人選。「神棚」「春墓選「泥」「蘇堂選。「勝閱」「井蛙選。「月の出」「鯛好坊選。「頑張る」——久米雄選。席題は當夜發表。會費は五拾錢。時間は午後六時ごら。といふ內容である。倶樂部は廣島驛の直ぐ西であるから、驛の人に聞けば敎へて吳れる。川柳人協會後援のもとに、花々しく開かれる大會に、柳友各位の參會を切望してやまない。既に各地から「大擧して行く」といふ便りに接してゐるし、前景氣は上々であるから、この機を外づさず出席されるやうにおすゝめしたい。（濱田久米雄）

飛燕往來

★森東魚氏より（北京）武玉川輪講四篇最終回の分、蛭子氏より廻はり、早速記入、秋の屋翁へ差上申候。不日御手元へ參る事と存じ候。五篇より大に勉强するつもりと蛭子氏も申越され候。（中略）本年は「馬」の特別欄にも參加致さず、誠に申譯無之候。心臟辨膜症と云ふやつにて愈々酒と遠ざかる事に致し申候。先夜小宴の席上にてフラ〳〵と相成、そのまゝ左樣ならかと存候處、また〳〵御用有之候樣にて、注射の御陰にて回復いたし申候。呵々。「五十年まきの時計だまき直せ」なと、よまひ言申居候。（一月廿二日）

★福田山雨樓氏より（北海道）二月二日東京出發、北海道へ出張致しております。只今、全道中でも最も雪の深いと云はれる石北線上越のあた

すぐ泣ける顔で妓の口答へ　同
寺町のポンプ安政六年製　大阪　佐野　牛歩
靴下は七足目から繼ぎを當て　同
百點にもやつぱり貧富の差があつ　同　藤谷　經峰
役得で慰問の娘等と寫してる　滿洲
啄木の涙を蟹も持てあまし　同
丙午を婦長は言はず勤めて居　同
小さくも再起の兄に鯛が燒け　名古屋　八幡　勿來
吸取紙　今日は南支へ　出すと知り　同
マレー戰線
鰐曰く又皇軍の渡河だつせ　同
子を見るは親にしかずと不良の子　長野縣　佐二木千隈
衣料點子は算術に使ふだけ　同
遠くまで無いを承知で買ひあるき　同
定例常會へソクリ談で解散し　北支　吉原　浦島
骨董屋北京の秋を拔け切れず　同
アメリカマリン引揚
マリン發つバンドへ東亞の雨靜か　同
青春期兵ですごして美まれ　滿洲　西垣　錦風
云ひ開く　智慧も軍規は許されず　同
子供誕生日に寫眞來る
膝の子に物云はせたそうな妻の顏　同
トラックの仲仕喧嘩の樣に積み　奈良縣　小谷華素兒
判取りの意外な額は女文字　同
測候所ひそかに暮れて灯がともり　同
熱き湯へふと老人にさからひぬ　大阪　久保甲斐郎
缺勤の公衆電話を寒く出る　同
天に地に謝し配給の酒を酌む　同　谷口　寒草
一點のカラーがかくもよどれたり　兵庫縣　同
肺病は僕が先輩ですといふ　同
子が出來てから女房の型となり　同
千人目の一ト針自分の部屋でする　大阪　宮田　不二
御夫婦で來る釣竿は打算めき　同

妻病んで大根おろしも力要る　同
風習を子に傳へたい年となり　大阪　八竹　正柳
娘の腰にして空席のチト狹く　同
疲勞した顏が車掌と揉めて居る　同
作業服男ばかりと云へぬ世ぞ　島根縣　横川　美柳
名人になると我れから出歩かず　同
昔ならすぐ酒になる儲け口　同
馬車の鈴北滿らしいと書添へる　滿洲　藤谷　經峰
卷脚絆十里と聞いて締めなほし　同
榮轉に老眼鏡の度をつよめ　大阪　谷崎　一昌
嫁ぎゆくモンペも數のうちに入れ　同
配給に昔の話が顏を出し　金澤　入口　障子
百點が餘る家族の身だしなみ　同
日章旗赤道直下の風が吹く　岡山　山上　笑風
土土土御國へ盡す道一つ　同
飴賣りや鍬の音を添へて賣り　滿洲　安田梧一路
蘭印も金のなる木は植ゑてなし　同
金出してお禮を言つてかつて來た　兵庫縣　小林かづさ
二十一又主取りする第二乙　同
消灯は故郷の子達の寢たころか　滿洲　いなば・はるを
バケツリレー子供もやれて國つよし　同
米英に日曜の朝氣味惡し　大阪　有馬　千斗
時勢なら出前斷る紙を貼り　同
眞珠灣桶狹間より手際よし　松山　山本耕一路
十二月八日未明Z旗艦上に翻へる
Z旗の下に勝ち拔く眉を揚げ　同
日清の軍服父の髭白し　兵庫縣　前田　勇風
外交もして來たと言ふ家出の娘　同
人の世の表裏へ自嘲となつた歸路　長野　堀内　敏郎
監哨の窓は寒さを知らぬとこ　同
鋼鐵回收風景
リヤカーがパンクしそうな回收日　松江　吉岡　遞兒

りを旅行致しております。三米を少し越してゐると云はれる雪、延長四キロ米以上もある石北隧道、熊も時々出る山奥、すべてが原始と驚異の連續であります。監察官に隨行してゐますので現場の方のお供もあり、かなり賑やかであります。來る十四日頃歸京の豫定でありますが、川柳塔を歸つてからではおそいので目下創作を急いでおります。今明日中に作つてお送りせなければならぬと思つております。一月廿九日（中略）で島取の方へ參り、二月二日朝歸京、早々旅に出ましたので相當疲れました。――この繪は列車の窓に描かれる氷雪の模樣です。零下十度以下になると、これが出來るさうであります。（歸は省略）

★中原銃人氏より（滿洲）お葉書と「川雜」ありがたうございました。「川雜」は早速、同好の戰友達に配りました處非常に好評、小生より皆に代り御禮申上げます。決戰下、先生はじめ愈々御勇健の由、尙誌上にて御令孃の御躍典を知り遲ればせ乍ら御祝ひ申上げます。小生も二月の最凍結期にありて尙頑張つて居ります。豆秋氏より度々ハガキ便りを戴き面白く拜見して居ります。同氏へよろしく御傳へ下さい。今朝も二重になつてゐる窓硝子に、二十度以下の模樣が出來てゐました。毎朝の溫度をこの二重窓によつて知ることに興味を感じて居ります。溫度が低くなるにつれて、その凍り方の繪が、小は櫻の花片から大は蓬の葉等、いろ〳〵變つた模樣を見せます。（一月某日）

いくさ續くゆとりに寄席の朗らさ　島根縣　同
旅すれば かくまで 旅をする人が　同　新出谷一聲
鼠曰く 戰ふ國の 臺所　名古屋　同　松井　靜子
病む身にも 春の息吹は 小窓から　同
資源愛護 足袋の型紙 買うて去に　大阪　東方　鷹丸
水鳥も 祖國の 聲だ 船戻る　同
軍服を着せるに母は のび上り　松江　恒松　叮紅
嘘云うて 夜の御飯が 不味くなり　同
託兒所で騒がしいとは云はれまい　松本　岩井　汗青
新刊も 抱へ列になる 嫁きおくれ　同
恩賜品拜授
白桐の胸の重みかみ民われ　京都　奥田　杜的
馬の香を殘し 軍用列車行く　同
入營の 夜眠れぬまゝに 勅諭よむ　松江　恒松布美子
女學生經濟學を 讀んでゐる　同
嫁きおくれたうわさあり女書記　金澤　山野　一角
驛賣の 名物 午後は 姿なし　同
ABCDこれと云ふのも居なかった
個料離
又藥か牛鼻息で 吹いたゞけ　松山　沖原　綠風
日獨伊又氣が合つた 判を 押し　同　澤久つらら
女事務列に這入れば 世帶じみ　大阪　木下　誠治
オフィスの一隅
チョコレート高貴藥にもさも似たり　同
子に生きる 日々銀幕に 遠ざかり　豐中　澤久つらら
献身の脈をとる手が 嫁き遲れ　同
停車場に立つ 憲兵の 無表情　熊本　藤本　水源
綿雪に 警戒警報靴の音　同
並ぶ間がなくて 平和な 暮しなり　豐中　三輪　丘堇
英米と戰爭がある 夜を寢る　同
男とは思はぬ手紙とゞくなり　島根縣　西村　早苗
冗談も云へずこれから 要塞地　同
秀才に 聞けばボルネオ 希望する　神戸　市川　治男

團體を 都會素氣なく 汽車にのせ　兵庫縣　同　吉本　某兵
砲聲の中で待機の碁のかたき　同
產聲が露營の夢にとゞろいた　山口縣　長野　井蛙
包圍陣など、アメリカも言はず　同
荒鷲を隱したまゝで 雲は晴れ
平和產業一部停止命ぜられる
技術工になつて會ふと 君と 僕　島根縣　田中　弘樓
節米へ主人は二食主義となり　同
戰時下大日本
防火用水 氷が張つて こともなし　大阪　加藤ライト
衣料切符住友さんと同じ 點　同
お茶席の衣裳の事は 過去の事　大阪　橋本志津惠
ほどきものうつかり出來ぬこの時勢　同
臺灣寄港
陣中閑ヤナナ 握つて 國便り　佛印　田邊　美陽
節分に「皇軍シンガポール猛襲」の記事を見て豆を撒く
豆つぶて チヤーチルの顏 平家蟹　伊丹　岩井　泉
ル氏あわてチヤーチル蒼くなる飛電　廣島縣　黑本　芳泉
敗戰に 白人の 鼻高過ぎる　諏訪　牛山　臥牛
女房の話は 食べる 事ばかり　大阪　六角　桂風
山の木が みんな焚木に 見ゆる窓　安東　山崎　勇祐
どつからでも來いと叫んだ日獨伊　松山　藤平　五樓
勝どきの唄白雲は 流れてゐ　兵庫縣　勝　草水
年に似ずモンペ古風な 仕立樣　松江　劍　沙汰樓
少年工傘をテツポにして 歸り　名古屋　東　正美
一粒の米も尊し
食膳の 前後 禮拜怠らず　鳥取縣　今村　夕路
モンペイの母の姿や 若かしり　出雲　森山さわだ
するだけの事をした 上出征し　大阪　中島　晩成
給仕まで 豆債券で 御奉公　大阪　谷口　於福
かう行けば直ぐと夜道を教へられ　大阪　浪花駒志希
決戰下冬の梅にもこの元氣　大阪　松岡　照二
むつツりとしたとこ好きと惚氣ち　羅津　多田　海朗
代用食へ 猫と犬とが さゝやいた　兵庫縣　吉本　尙代
慰問文書きつゝ 寒さ考へる　青島　菖蒲　榮城
ポチの家迷彩されて日の 温し　大阪　恩賀　紀川
娘の結婚迫る
切符制になつてよろこぶ男親　兵庫縣　澤田　淺女

二〇頁下段の續き

老人　それでお國は。
掏摸　……。
老人　喃、國元は。
掏摸　……。
老人　喃。
掏摸　それは、云はれねェでやす。
老人　云はれねェ。
掏摸　死んでも、云はれねェでやす。
老人　死んでも。
掏摸　若しこんなことが。
老人　……。
掏摸　こんなことが。
老人　……。
掏摸　お祖母あの耳へは入る樣なことがありやしたら。
老人　……。
掏摸　お祖母あは。
老人　……。
掏摸　お祖母あは死んでしまひますだ。
老人　(と、ベンチの上へ泣きくづれる)
も、もつともぢやく、
(と、掏摸を抱きしめる樣にして)
もつともぢやい。
(と、泣く)
可哀想に。
(と、目頭をおさへる)
(乙に)
甲　お前は殺生な奴やで。
乙　すまねェ、、。
(と、頭を搔く)
男　巡査、むんづと腕を組む。
花が散る。
—幕—

川柳とはどんなものか

初等川柳講座（二）

麻生路郎

現在川柳を創つてゐる人達は、いづれも川柳とはどんなものであるかといふ所謂川柳の定義をよく究めてから川柳されるやうになつたのではありません。

何かの機會に、古川柳か、現代川柳の幾つかを讀んで、これは面白いものだな。自分もこんなものを一つ作つて見やうと思つたのが、はじめではないかと思はれます。なかには人からすすめられて作つた人達も相當にあるでせう。その何れであるにしても、川柳とはどんなものかといふ定義などは殆んど問題にしないで、句の實例を見て、川柳とは、まあこんなものだ位に考へ、自分の頭の中に薄ぼんやりと川柳の外廓を描いてそれに似たものを作られたといふのが、はじめであらうと思ひます。

極く少數の方は、定義について先輩に質された方もありませうが、質問をされた方が滿足されたやうな明確な定義を示して川柳の解說をされた先輩はおそらくありますまいと思ひます。その多くは「まあ、そんな理屈はあと廻はしにして、五音、七音、五音をならべて見給へ、それを添消してあげやう」といふ風な先輩ではなかつたでせうか。それは先輩自身が明確な定義を持つてゐなかつたのであります。先輩自身すら、頗ぶる漠とした知り方であつた證據には、さて開き直つて定義を訊かれると、全く明答が出來ず川柳の起源を述べて見たり、內容の主たるものを擧げたりして、お茶を濁して來たのであります。そうした先輩者の非學問的な研究態度が川柳の進展を大いに阻礙したことは云ふまでもないのであります。

從來、いろんな人達によつて、川柳の入門書が出ましたが、その何れを見ても明確な定義を揭げて居りません。目次を見れば、川柳とはどんなものかといふのが二三あつたやうに思ひますが、中を讀んで見れば、それが川柳とはどんなものであるといふ所謂定義らしい定義を示さず、他のことに言及してゐるか、この本を全部讀了すれば判るといふやうな遁辭で逃げてしまつてゐるのであります。そうした曖昧な入門書以外には川柳の解說らしい解說書が一冊も出てゐないのでありますから眞面目に川柳を研究して見たいといふ人たちが、戸惑うのも無理はありません。川柳家が蔑視されるのも、そうした點にも由來してゐるかも知れません。

では、川柳とはどんなものか。それを一言に要約することは、なか〳〵至難なわざであります。至難ではありますが出來ない事ではないのであります。今のところ完全な定義を擧げることは難しいが、自分として、先づ、これ位なところでは、どうであらうかと云ふ定義を次に擧げ、その定義について解說を進めやうと思ひます。

川柳とは人間及自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる內容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く十七音字中心の人間陶冶の詩である

詩型の上から云へば、十七音字中心は川柳に限られた詩型ではありません。俳句も同型の短詩であります。しかし俳句は韻文律による短詩であつて、その點、川柳と類を異にいたして居ります。詩型では俳句の如く「や……かな」はいけないとか、「や……けり」はいけないとかいふ風な多くの拘束を持たず、表現上全く自由なのであります。殊にその句を構成する語は、平言俗語であります。時に雅言を用ひても少しも差支ないのであります。その內容を構成するところの素材を檢討すれば森羅萬象一つとして句の素材とならぬものはないのであります。これは古句についても、現代句についても云ひ得るのであります。そして幾つかの素材の組合せが一句の內容を構成いたします。

そして、その構成上作家の精神的な態度の如何で、人間陶冶の詩となるか、文字の遊戲となるか、その分岐點となる譯でありますから、右の定義で、人間陶冶の詩であるといふ最後の括りが、その重點なのであります。これでは定義として少しく長すぎる慊ひがありますが、これだけは云ひたいのであります。モツと切り詰めれば

十七音字中心の人間陶冶の詩

であります。私自身にとつては川柳とはどんなものであるかが、この短い十三字のうちに包含されてゐるのでありますが、それだけで理解し得られぬ人たちは前揭の定義によつて肯いていただきたいのであります。

従來、川柳を定義した二三の書がないでもありませぬがそれ等は多く古川柳に對する狹義の定義であるか或ひは燃燒の足りない定義となつて居ります。明治三十七年九月に刊行された「川柳入門」の著者池田錦水氏は

「川柳とは季無し發句とも言ひ、又狂句とも言つて、十七文字より成つた一種の句なのである。」

と述べてゐられる。更に語を補つて、

「その外形に付いて言へば、發句の如く切字を挾まず、又必ずしも四季の景物を詠み込まず、その調も、五七五のみに限らないで、七五五なのもあれば、八四五なのもあり、或は七七三、七六四などのものさへあつて、其他何等の羈絆にも拘束されぬ自由自在の體を有してゐるのである又その内容に付いて言へば發句の如く優雅の趣味を主としてゐるものではなく、穿ちとをかしみとを二大要素として、多く人事に關する滑稽諷刺を主として詠めるものである」

とし、

(一)その手代、その下女妻は物云はず

(二)貧すればどんすの夜具に寢る娘

(三)嫁のとし捨鐘ほどは鬼をつき

などの句を例とされてゐるがこれでは川柳とはどんなものであるかの解説としては甚だ心細い次第で、定義は愚か、句の正解といふことすら、迷路に入つてゐられるのであります。なるほど、(一)の句は川柳でありますが(二)及び(三)の句は懸調であつて狂句なのであります。川柳と狂句の差違は何れ別稿で説きますが、いかに明治時代とは云へ、入門書を著はすほどの著者が、川柳と狂句を混同してゐられるのでありますから今日でも狂句を川柳だ川柳だと云つて、貶してゐられる人があるのもうなづけないことはありません。

しかし、川柳を古來、狂風俳句だの、狂句だのと云つて盛んに駄句つた宗匠連もあるので、あながち、川柳入門の著者が、季無し俳句とも狂句とも云つたと述べられたところで、全然間違つてゐるとも云へないのであります。又この著者は十七文字より成つた一種の句だと述べてゐられますが、この十七文字は假名であらはした場合の謂ひでありまして、眞字を交じへないで計算しての十七字なのであります。日本の假名文字は一字一音で表はすことになつてゐるからであります。私はその意味で、十七文字と云はず十七音字と稱して居ります。このことは何れ型式について詳しく解説いたしますので、その方へ讓ります。

右に述べました定義から、川柳とは一體、どんなもので

(十八頁下段へ續く)

耕せ耕せ 第二の國民

豆 お芋 みんなで植えるものをきめ　清水白柳子

ボチ借りて來たが小判は出て來ない　小川恒明

休閑地軍艦マーチで耕され　上田翠光

丈け程の鍬を上手にふり上げる　戸田孤篷

休閑地思ひ〳〵の鍬を上げ　橋本綠雨

僕達の組が一番耕した　宮田不二

鍬を持つうれしさ町のヨイコドモ　管平行

カメラ　福井哲

お隣組のためのお座敷芝居

劇柳川

公園夜話（場壹）

小畑自有浪

後藤田凡生（畫）

時は現代、處は或る大都會の公園、氣候は問はずも、假に春の夜として

人物　老人、巡査、掏摸、ルンペン甲、同乙、掏られた男。

舞臺は、中央にベンチ、其後に一基の街燈、櫻の樹、花が咲いてゐる。中空に、まんまるいおぼろ月。

幕開く、夜の十一時頃、上手より、ルンペン乙が、ツンと出鼻をかみながら、兩腕を組んで、何か探し物をする樣に、地面をきよろ〳〵見廻しながら來る。と、此時又下手より、大きな袋を背負つた片腕のルンペン乙が來る。

甲　あつた〳〵。

（と、實の吸ひ殼を拾うとすると、それを乙が素早く横手から奪う樣に拾ひ取る）

乙　何しやがんね。

甲　何んだとッ。

（その見幕にびくッとした樣に）

乙　な、なんやね。

甲　文句がありやあ聞かしてもらおうぜ。

（と云ひながら煙草を吸ひつけて）

乙　呀ッ、いけねエ。

（と、それを投捨てゝ顔をしかめて唾を吐く）

甲　どないしたんやね。

乙　どうもこうもあるもんかい、まあおめいも一服吸つて見な。

甲　はてな？、

（と、それを又拾つて吸つて見て）

あゝこらあかん。

（と、あわてゝ投捨て）

あゝ臭さ。

（と、唾を吐きながら）

こらおまへ、犬が小便かけとるがな。

乙　はつ〳〵〳〵、ざまあ見ろ。

甲　殺生な奴ちやで。

乙　ちつたあ肝に銘じたか。

甲　何がやね。

乙　此の非常時によ、ルンペンなんかして居る奴には、ろくなこたあ無エつてことがよ。

甲　ちえッ、さう云うあんたはんは、ルンペンさんやおまへんさかいにな。

乙　はつ〳〵〳〵、片腕より無エ、片輪者の俺なんざあ兎も角もよ、見りやおめいは、五體立派に揃つた人間らしいぢやねエか。

甲　ちえッ、腕が一本よりないと思うて、うまいこと云ひやがりよる。

乙　冗、冗談ぢやねエ、いくら片輪者の俺だつて、此の非常時局に、何日迄もこんな非國民な眞似をしちやあ居られねエと焦つて居るんだ。

甲　そ、そらお前、わえかてこんなけつたいな商賣から早う足を洗うて、まる〳〵一本の煙草が吸うてみたいわい。

乙　はつ〳〵〳〵、それならちつたあ俺を見習ひな。

（と、ふところから貯金帳を取り出して）

これだ、これを見な。

甲　呀ッ、そ、それ貯金帳やないか。

乙　へつ〳〵〳〵、まあ拜んどきな。

（と、月明りに通帳を繰つて見せる）

甲　へーい。

乙　どうだ。

甲　仰山しとるやないか。

乙　合せて四十七圓。

甲　偉いなあ。

乙　あともう三圓で五十圓。

甲　ど、五十圓、そ、それだけあつたらお前、人間並に一つべんわあッと、大騷ぎが出來るがな。

乙　馬鹿野郎ッ。

甲　せやけんどお前、ルンペンのくせに、そんな大金ためこんでどないすんね。

乙　はつ〳〵〳〵、冗談ぢやねエ、まだ〳〵これぢやあ足りねエんだ。

甲　はあてね。

乙　あともう百四五十圓ため込んでよ。

甲　あれまあ！。

乙　義手つて云う、片腕を買ひ込んでさ。

甲　成程。

あるかといふ事を理解されたでありませう。從來、川柳に對する定義が、古川柳の持つ特徴の二三を捕へて、その特徴さへあれば川柳であると云ふ風に狹義に解說いたして來て居りますのが川柳の眞の定義から岐路に入つてしまつたのであります。例へば池田錦水氏が述べてゐられるやうに穿ちとをかしみを二大要素として多く人事に關する滑稽諷刺を主として、咏めるものであるといふことになりますと古川柳を狹義な觀方から類推しての定義であつて、古川柳でも、この定義に當嵌まらぬ句が相當に澤山あるのであります。まして現代の川柳に對しては妥當な定義でないと云ふことになります。從つて現代川柳の一二の特徴を捉えての定義では古川柳を包含して川柳と呼ぶ時に、これ又妥當でない定義となります。斯うした矛盾が、何處にあるかと云ふことを研究しないで、川柳を定義づけやうとするから完全に近い定義が出來ないのであります。

川柳を作るのに、そうした完全に近い定義がなくても、作れるではないか。川柳が作れさへすれば別に、そんなに苦心をしてまで定義をつくる必要がないではないかといふのが、これまでの先

乙　ルンペンの足を洗つて按摩でもするつもりさ。

（と、上手へ去る）

甲　按摩？、あんま、はてな片手に木の手をはめて、あんまが出來るかなあ。

（と、乙が又引返えして來て）

乙　おゝッ。

甲　何んや。

乙　俺が貯金して居るつてこと、誰にもしやべるぢやねェぞ。

甲　あほらしい、人が金貯めてる樣なそんなけつたくその悪いこと、誰がしやべるもんかい。しかしなあおいお前、片手に木の手はめてそれでどないして按摩が出來ると思うとんね。

乙　はつ／／／／、馬鹿だなあおめいは、片手でもんで片手で叩きやあ、叩く片手は痛くねェから、半分はただ儲けつてことが、おめいにやあわからねェのか。

甲　あゝ成程。

乙　あばよ。

（と、上手へ去る）

甲　成程、へつ／／／／、彼奴考へやがつたなあ

と、此時下手に足音がする、甲振り返つて「呀、こらいかん」と、あわて、ベンチの下へもぐり込む。

と、下手から巡査來る。

巡査　（月を仰いで）

あゝいゝ月だなあ、去年の今頃は、中支の戰線でこんな月を見て居たつけ、さうだ、櫻は無かつたが、あの時もちようどこんなおぼろ月夜だつたつけ、はつ／／

名吟だ。はつ／／／／。「野糞していざ敵討たんおぼろ月」か。

（と、口ずさみながら上手へ去る）

甲　（ベンチの下より出で來り）ちえッ、

（と、巡査の後姿を見送つて）

汚い奴やなあ、わえらがこゝらでちよつと小便しよつても怒りよるくせに、勝手なもんやなあ。

と、又此時下手に足音がする。甲振り返つてはつとして。

甲　こらあかん、今夜は又、えらい大當りや、三隣亡かいな。

（と、又あわてでベンチの下へもぐり込む）

と、此時下手から、よぼ／／の老人が、首から大きなボール紙の札をつるしてやつて來る。其のボール紙には「丹波之國篠山の男、松下太郎吉、公用につき遲刻醫國をせよ、副父嘉平」と書かれてある。

老人　やれ／／。

（と、ベンチに腰を下ろして）

あゝア、今日で早三日、やつぱり無駄骨ぢやつた。

と、此時、甲、ベンチの下より首を出しかけて、上手を見て、はッと又首を引込める。と、巡査が又引返えして來て老人の前に立止まる。

老人　（おど／／とした樣に）これはどうも。

巡査　（聲を上げて札を讀み）成程、あんたでしたか。

老人　は、はい。

巡査　あんたのことは新聞で拜見しましたよ。

老人　お恥しゆうございます。

巡査　全くお氣の毒ですな。

老人　何をあなた、まことに申譯のねェ始末で。

巡査　僕等も、本部の方からの指令で、心懸けては居るのですがね。

老人　お手數をおかけ致しまして、恐れ入りますでございます。

巡査　いやあ、なあに。花が散る。

巡査　あゝ風が出て來た樣だな、春とは云ひながら、やつぱり夜ふけだ。ねェお爺いさん。

老人　は、はい。

巡査　こんな處で、風でも引いちやあ大變だから、交番所へ來て休みませんか。

老人　は、はい、御親切樣に

輩の歩いた道であります。これは一應尤のやうでありますが、地圖はなくとも、歩るき廻つてゐさへすれば經驗でいつかは自分の行きたいと思ふ目的地に達することが出來るではないかと云つてゐるのと同じで、地圖があれば他の未知の人々にも目的地が早く判斷し得られるのと同じであります。その點から川柳を定義づけると云ふことは決して無意義ではないのであります。

然らば古川柳と現代川柳とでは何故定義にそうした差違を生ずるのであるかと云へば川柳の本質が時代と共に漸次飛躍して、あるひろがりを持ちます。この擴がりを內容の進化と呼ぶといたしますれば內容の進化によつて、その定義も、それにふさはしい定義とならねばならぬのにそうしないところに矛盾が出來て來て、定義が役立たぬ結果を生ずるのであります。

又、作者の作句態度によつても、定義の適確さが失はれます。私の定義は人生派の藝術として、定義づけたので、從つて川柳を作るのに、眞面目に嚴肅に考へて居りますが川柳を一つの遊びと觀て、面白く洒落れのめす作句態度の人達にとつては、川柳は文字の遊戯に過ぎなくて、私の定義には當嵌まらぬことになります。

巡査　何んだつたら、今夜、狭苦しい處だが、僕等とおし合つて、交番所で一緒に寝ませんか。

老人　勿體ない、勿體のうございますだ。折角の御親切を無にする樣ではございますだが、ついそこに、三日前から泊りつけて居りやす安宿がございますだで。

巡査　さうですか、でも、ちつとも御遠慮なんかなさらなくつたつていゝんですがね。

老人　御親切樣に、〳〵。

（と涙をおさへる）

巡査　で、その探して居られる太郎吉君と云うのは、あんたのお孫さんですね。

老人　は、はい、わたしには天にも地にもかけがえの無エ、たつた一人の孫でございますだ。

巡査　で、何日頃家出をされたんですか。

老人　家出ぢや無エでがすだ兵隊檢査が濟むなり、一旗擧げて來るだと申しましてな、立派に家を出て行きましただが、はい、それからもう十年。

巡査　成程。

老人　何分、早うから二た親に死に別れた、不倖な奴でございましてな、五つの時から、わしの手一つで育て上げましただよ。

巡査　それは〳〵、大變でしたろうな。

老人　はい、可愛けりやこその、苦勞のありつたけをしましただ。

巡査　御尤です。

老人　おかげで、祖父いのロからこんなことを申すのも何んでやすだが、無類の孝行者でやしてな。

巡査　さうでしたか。

老人　早う金を慥へて、ぢいさんに樂をさすだと、口ぐせの樣に申しましてな。

巡査　成程。

老人　それでとう〳〵家をとび出しよりましただが。

巡査　それから便りはあつたのですか。

老人　それが其の、こちらの方から、其の當座に四五へん、職が見つからねエで困つて居るだと、便りを寄越しましただが。

と、此時、上手から、「掏摸だ〳〵」と叫び聲と共に、片腕のルンペンと、掏られた男に追駈られて掏摸が逃れ來る。

巡査　待てッ！。

（と三人の間に大手を廣げる）

ルンペン甲、ベンチの下よりとび出して。

甲　このがき。

（と、乙にとびつく）

乙　馬鹿野郎ッ、

（と、振り拂う）

甲　（どッと引つくり返つて）あいたゝゝ。

乙　野郎ッ。

（と、掏摸の手を捻ぢ上げる）

掏摸　いてゝゝッ。

（と、悲鳴を上げる）

乙　太てい野郎だ。

男　すんまへん〳〵。

（と、乙に頭を下げる）

巡査　よし〳〵、もう放してやれ。

乙　へい。

（と、放してやる）

巡査　おいッ、何を掏摸たんだ。

男　へい、わたえの、蟇口をやりよりましたんで。

巡査　出せッ。

掏摸　すまねエでやす。

（と財布を出す）

男　かせ。

（と其れを取ろうとする）

巡査　（其手をおさえて）一應本署まで來てもらはなくつちや渡せないよ。

男　へい、成程、御尤さまで

巡査　（甲乙へ）君等も今夜は感心だつたね

甲　へつ〳〵〳〵、それがその。

巡査　はつ〳〵〳〵、尤もお前は大體があまり感心せん方の部類だが、（と、乙へ）君は、感心な、貯金のルンペン君だつたね。

乙　へい、それに此の野郎、

（と、甲を顎でしやくつて）わつしにとびかゝつて來やがつたんで。

巡査　はつ〳〵〳〵。

甲　すまん。

（と、乙へ頭を下げる）

巡査　ぢやあみんな、

（と、掏摸の手を捕つて）一寸本署まで來てもらおう

掏摸　いてゝゝッ。

巡査　はつ〳〵〳〵、おい、

（と、掏摸に）お前もまんが惡いのう。

掏摸　天罰でやす。

老人　それにしてもお前さ、

（と、掏摸の肩に手をかけて）見ればまだ、都會なれねエ人の樣ぢやが。

掏摸　はい、もう、何んにも聞いておくんなさるでねエ

巡査　はつ〳〵〳〵、今夜は大丈夫だよ、今夜はお前達が大手柄をしたんだから。

甲　ほんまにさうだすがな。

巡査　明日署長さんへ報告して君等の奮闘に何等かむくいなくつちやあならないからね。

甲　へエ？。

男　さうだ〳〵、わたえも此のまゝではほつとかれしまへんがな。

甲　と、いひなはると。

男　御禮にあつさり一割出しまつさ。

甲　おゝけに、それでその、その財布に何んぼ程這入つとりまんね。

男　さあ、

（と、ちよつと考へて）呀ッ、空だつさ。

甲　から。

男　すんまへん、さつきちよつと一杯やつて、へつ〳〵〳〵、つる〳〵てんだんねやがな。

乙　はつ〳〵〳〵。

甲　笑ひごつちやああらへんがな。

巡査　はつ〳〵〳〵、おい、

（と、掏摸に）お前もまんが惡いのう。

掏摸　天罰でやす。

老人　それにしてもお前さ、

（と、掏摸の肩に手をかけて）見ればまだ、都會なれねエ人の樣ぢやが。

掏摸　はい、もう、何んにも聞いておくんなさるでねエ

老人　いゝや、聞くべい、若い身空で、どうしてまた、こげいな不量見なことをしよつただ。

掏摸　食うに困りやしただ。

甲　あほうぬかせ、こんな時節に職がないと云うわけやあらへんし。

巡査　はつ〳〵〳〵、さう君はなんだ。

甲　あゝこらすんまへん。

掏摸　でも、まだ、此の間田舍からやつて來たての間なしでやして。

老人　ふむ。

掏摸　持つてた僅なお金を。

老人　どうしなすつただ。

掏摸　みんな、掏摸に取られてしまひましただ。

老人　さうけい。

掏摸　腹がへつて。

老人　ふむ。

掏摸　腹がへつて仕樣がねエものだで、つい。

老人　ふむ〳〵。

掏摸　申譯がねエでやす。

老人　可哀想に、

（と、財布を取り出した）歳はいくつに成りなすつただな。

掏摸　十九でやす。

老人　親は。

掏摸　小さい時から無エでやす。

老人　おぢいは。

掏摸　國に、お祖母あが一人だけありやす。

老人　おばあが喃。

掏摸　はい。

（一五頁下段へ續く）

柳川にうまを拾ふ

鈴木石鹿

馬に因む數々

馬糧
豆や藁ならましだが、色んなものを柳人は喰べさす。

儲けたが馬變らずと豆と藁　海洋人

常世が馬の疊まで喰ふ　古句

煮うり屋の柱は馬に喰はれけり　同

馬盥
馬を洗ふ道具。

感謝するには馬のたらひが淺すぎる　石竹

鞭
人間と馬との意志疎通の道具。

鞭打たにや馬へ心が通じぬか　鐵洲

鞍と鐙
乘馬や駄馬には必要。

田舍醫者使は來たり馬に鞍　古句

指折れば涙のかゝる鞍證　同

馬の帽子
人間の愛情の結果だ。

炎天の馬の帽子は耳を出し　珍之介

乘馬服
どちらかと云へば有閑階級のものだ。馬にも乘れない乘馬服などを見る。

乘馬服銃後の色が少し派手　嬰人

厩
厩戸皇子即ち聖德太子の古句をも見ることが出來る。

お厩へ取揚婆がかけつける　古句

賣つた馬やつぱりゐない厩かな　青雷

馬場
馬場で有名なのは高田の馬場。

高田の馬場に度々のうそ　古句

乘るもんじやないと馬場からびつこ出る　同

馬宿
宿場〳〵にあつた。

馬宿へ文をとゞける輕井澤　古句

下馬先
下馬すべき所を云ふ。

下馬先ではたら〳〵と笠をなげ　古句

馬印
昔の武士の陣頭に立つたマーク。有名なのは千成瓢簞や六文錢

憂のない系圖瓢の馬印　古句

馬醫者
今なら獸醫の一分科。

あぶなく乘て通る馬醫者　古句

騎馬巡査と憲兵

騎馬巡査腰をひねつて彌次を追ひ　木兎子

群衆へ憲兵馬をつきつける　素峰

馬子
馬子は馬士とも書く、馬方とも云ふ。

馬をしからせては馬子も一人前　古句

石灰のたんと入つたを馬士は呑み　同

馬方も馬の心になつて押し　松太樓

馬士唄
これから轉じたものに追分節がある。

馬士唄の江戸にも似合ふ松の内　古句

伯樂
馬喰、馬士郎とも云ふ。

內證の握手で馬の値が極り　文象

馬喰の子も鬣の付く酒　古句

馬市
伯樂の活躍舞臺

賣られる馬の顏へ日がさす　古句

馬市に引かれ行くのか鞍もなし　規堂

催馬樂（サイバラ）
奈良朝時代に馬を曳く時に唄つたものを、平安朝時代に雅樂としてとり入れた歌曲。古句には馬關の稻荷町を詠んだ句がある。

催馬樂で路次を冷かす下の關　古句

馬盜人
今なら自轉車か自動車を盜むのだらう。盜んだ馬で馬子になつたり、宿場女郎に戲れたりするわけらしい。

盜んだ馬で坂は照々　古句

輕井澤馬盜人の尻が來る　同

馬賊
は馬を盜むのではない。鴨綠江の對岸によく出たものだ。

結氷のそれだけこわい馬賊なり　數命

馬道具屋

馬道具屋亭主と見えて皮に座し　古句

騎士（ナイト）
日本の武士や騎兵、砲兵、特務兵等の句は餘りにも多いから略し、西洋の騎士即ちナイトの句を。

騎士の道キツスの作法なども說き　孤篷

古本賣買
大阪道頓堀
天牛本店
九四七二・八四七二南電
振替大阪五六六六〇五番

柳川 草津温泉

北川春巣

私は出張を命ぜられて草津に赴き草津温泉に關して聊か調査見學して來る機會を得たので、興味深く思はれた事を紹介する。

一、草津

草津の温泉は昔から天下三名湯の一に數へられ、他の二名湯、有馬と道後が衰へてしまつた今日も、尙滾々と湧き出る熱湯の半分をも使ひ切れずに捨てゝゐる豪勢さで、純然たる療養温泉として、入湯者常に二千人を下らぬと云ひ大いに繁榮してゐる。

草津温泉は群馬縣、吾妻郡の高原にあり、山の中の事として自動車の制限を受けてゐる今日、交通の便惡く東京上野を朝八時半の快速列車で出發し、輕井澤で輕便に乘換へて到着するのが午後の三時である。丁度ラヂウムで有名な三朝温泉の大阪に對する距離に匹適する。然も治病を希ふ者は千里の道を遠しとせず、北は北海道から西は九州の果に至る國から蝟集してゐる有樣を見れば、如何に温泉の効能顯著なるものがあるかが窺ひ知られるのである。

二、酸性泉

草津温泉の特徴の一つは強い酸性を呈する事で、之を飲むと丁度醫者の投藥する「鹽リモ」の味がする。目に炎症でもあるとしみて痛い。これは温泉中に硫酸や鹽酸を含んでゐる爲めであつて、此の事が又後で述べる治療の効果を有するのであるが此の種の温泉は日本に二三見られる他外國には類のないものである。

草津温泉は其の他に又硫黄を含んで居り温泉分類上、硫黄含有酸性泉に屬してゐる。

シロップが欲しく酸性泉を飲み
無酸症酸性泉をすゝめられ
酸性泉味見はうがひだけにする
硫酸で磨いたと云ふ肌さはり

三、高温浴

草津温泉の第二の特徴は高温浴である。西洋人がぬるい風呂へ入る事は周知の事であるが、此の温度が攝氏三十六—七度。日本人は有名なあつ湯好きで其の温度が四十一—二度、餘程辛抱強い人で四十三—四度である。草津温泉ではまだ〳〵熱くて湧出時六十度位を呈してゐる。之を利用して時間湯を稱する特殊の荒療治を行ふのである

時間湯と云ふのは、五箇所程町内に散在する町營の共同浴場で時間を決めて一日四回行ふのであるが、四十八度と云ふ物凄く高温へ三分間だけ入浴せしめるのである。

（イ）湯もみ

時間湯の構造を述べると、各時間湯には浴槽が四つ並んでゐて、一番湯二番湯と云ふ風に名が付けられてゐる。一番湯には泉源から引いて來たまゝの湯が入つてゐて、温度は五十一—二度二番湯は一番湯から湯が移行するやうになつてゐて、温度稍々低く、三番湯、四番湯は順次湯が移行するので温度も順次に低い。入浴者は時間になると、四つの浴槽の周りに集つて、長さ六尺、巾二尺位の板で此の熱い湯をかきまぜるのである。之を「湯もみ」と稱へ、此の時に有名な「湯もみ唄—草津節」を唄ふのである。唄に合せて湯もみを行ふ有樣は丁度ボートレースのオールが揃ふが如くで誠に壯觀である。

湯もみ唄朝寢の床へ聞えて來
湯もみ唄遊んだ頃ののどを出し
湯もみする額の汗も草とけれ
人みんなチヨイナ〳〵の顏でなし

（ロ）湯かぶり

入浴前の此の準備行動（湯もみ）は實に荒行であつて、病弱の者の爲し得べき業でない。從て草津の湯へ入り得る病人はおのづから決る譯で、例へば心臟病者、高血壓症・肺結核の重症者などは入浴を禁ぜられてゐる。湯もみを行ふ事約二十分の後、一番湯の温度は四十八度に下る。（二番湯以下はそれより低い事勿論である）。其の時湯長がいゝ聲を張上げて、音頭を取るやうに入浴を命ずる。但し一番湯へ入り得る人は入湯者中の古顏で極く少數しかゐない他の人々は温泉醫の處方により二番湯、三番湯又は四番湯へ入る。そして入湯の日を重ねるにつれて次第に高温に移るのである。四番湯が四十三

—四度でこれへ半身だけつかるのが最も輕い療法である。湯長の命が出ると直に入浴するのでなくて今迄半裸で湯もみを行つてゐた「病人」は全裸となり、浴槽の縁へ跪いて持參して來た柄杓で、いきなり二十杯程湯を頭へかぶり、それからおもむろに熱い湯へ沈むのである。之を湯かぶりと稱し、熱い湯へ急に入ると腦貧血などを起す危險があるので、其の豫防の爲めだと云ふ事である。草津温泉の此の療法は明治の初年以來行はれてゐる經驗療法であり、從て此の湯かぶりに對する說明なども近代になつてからつけたものであるが、科學的によく說明のつくものである。

湯もみは誰にでも見學させるが、湯かぶりの方は、全裸になつてしまふからであらう一般には見せない事になつてゐる。浴場の入口にも「湯もみがすんだら一般の方はお歸り下さい」と書いた貼紙がしてある。が私らは湯長の好意により、東京から見學に來た立派なお醫者さん」と云ふ紹介で患者に納得して貰つて、三分間の入浴が終る迄見學を續ける事が出來た。

神に祈るやうに湯かぶり跪き
湯かぶりのあつちを向くは女なり
湯かぶりの目に酸性泉がしみ
湯かぶりを窓から月にのぞかれる
白石に負けず湯かぶり浴び續け

（ハ）湯たゞれ

も一つ此の療法で特異な事は、毎日斯の如く入浴する事十日に及ぶと、腋窩、鼠蹊部、陰囊の周圍等に吹出物が生じ、鼠蹊部の淋巴腺は腫れて來て、多少の痛みを覺えるに至る事である。これを「湯たゞれ」と云つて、一般には此の部から毒氣が出てしまふのだと信じられてゐる。之は前記の如き酸性泉に入浴する爲めのたゞれで、學問的には酸性泉浴湯皮膚炎と名付けられてゐて、兎に角温泉の効いて來た印である。湯たゞれは入浴を續けても、四五週間で直るもので、たゞれの發生中に入浴を中止したり、歸國したりすると却て不快な症狀が起る事があると云はれる。從つて草津温泉への入浴には大體一箇月乃至、一箇月半の豫定で行かなければならない。

湯たゞれの出來たを國へ書いてやり
湯たゞれの出來たびつこを羨まれ
たゞれ見せ合つて同病仲がよし
親不孝へも湯たゞれが出來始め
草津節上手になつて歸國する

四、効能

要するに草津は療養のみの温泉であつて、他の温泉地の多くのやうな半遊蕩的な氣分は少しも感ぜられない。

案外に地味な草津をみて通り

水客氏もこんな風に見て居られる。然も土地は高原に在り、氣候、日光など周圍の環境は療養に最適の條件を備へてゐる。「病氣になつたら又來ませう」。と私も旅館の人に約束したのであつた。

新婚の來るとこでない草津の湯

尙草津には癩の患者の來浴する者が多いと聞いてゐて些か不氣味に思つてゐたのであるが、現在は草津から數粁距つた地に完備した癩の療養所が出來てゐて、完全に隔離される疾患の二、三を記して稿を終る事にする。

一、慢性濕疹、其他慢性皮膚病
一、胃腸病、痔疾
一、リウマチス、神經痛
一、慢性氣管支カタル、喘息
一、慢性淋疾、古キ梅毒
一、婦人病

刑部さま御入りと草津大さわぎ

と云ふのがある。癩の大谷刑部を詠んだのである。

最後に斯くも荒療治を行ふ草津の適應症に擧げられてゐれて居り、私の心配は全くの杞憂に過ぎなかつたのであつた。古句に

川・柳・書・架 (81)

輝く青丘人

正木準章著

▼本書の卷頭には韓相龍、上澤秋湖大谷五花村、高元氏等の序並び勳に自序がある。

▼目次は「間島と鑛の問題」以下三十五章に別たれてゐる。そして到るところに川柳を挿入してある。

▼昭和十七年二月十二日第一版發行昭和十七年二月二十日第二版發行。B列6號判一八〇頁定價一圓三十錢

發行者京城府義州通一丁目一三一番地、關根利重、發行所京城府林町二五一朝鮮川柳會

▼著者正木準章氏は朝鮮總督府中樞院屬であり、書に巧みである。柳建寺と號し朝鮮川柳界の開拓者である

大東亞戰の句を語る

路郎・葭乃・丹路・豆秋・某人

路郎＝今月は一月號と二月號の「川柳塔」の中から大東亞戰爭に關する句を幾つか拔いて見やうと思うがどうでせう？

豆秋＝それは面白いですネ。隨分澤山ありますよ。二月號を例に採つても「川柳塔」の全作品に三六％「近作柳樽」には一一％もあります。

丹路＝戰爭の句は豆秋さんの獨陣やからな。（爆笑）

某人＝全く吾々にはゴーチンや

ＡＢＣＤ活字のある丈さ

あ續け　（生々庵）

豆秋＝それは戰爭前でもあつた譯ですね。

路郎＝まあ、そうだネ。

葭乃＝やつぱり戰爭の句ですネ。その句はどちらの側の立場からみてるのでせう？

路郎＝勿論日本だ。これは生々庵氏の聲であり、一億國民の聲でもある。ＡＢＣＤが一つの流行語のやうになつて來てゐる際、ＥＦＧと活字のあるだけ束になつて來いと云ふところ、文字の上の技巧以上のものがある。（一同沈默）

某人＝まあさつき奥さんがおつしやつた事もそんな風に考へて聞くと一寸頷けるところが無いでもない。これは此際アメリカ又は反樞軸側の連中が餘り川柳を作るのを聞いた事がないから、あちらの句であるとすることには意味が無いとして、同じやうに滿潮氏の「ＡＢＣ・Ｄも交つたちよこ才さ」なんか實にＡＢＣＤと云ふ一種の流行語を使つてしかもその言葉を巧く叩き伏せてゐるやうな感じの句だと思ひます。實際に於てＤ以下はたとへどんな字が群り現れやうと問題でなく芝居の竝び大名程の効果も持つてゐないと思ふ。しかもネ、豆秋さん！その中のＣを除けて、更にＡが加つてゐますネ。

豆秋＝御詔勅が降つて後に作つた句だと思ひます。これがアメリカ側だとすると、アメリカが「さあ續け」と云ふたとしても利口な國は横に向くと思ひますネ。

某人＝まあこの句は簡單に云ふと子供がなんぼでも來いと云ふあれですネ。

では今度は「十二月八日」又は「詔勅渙發」の日附の這入つた句で行つたらどうです？

路郎＝「それもいゝだらう。ではこれはどうだネ」

モヤ〳〵が一度に晴れたみことのり（豆秋）

某人＝僕は一月號をみてネ豆秋さんの句をずつとみてもう戰爭の句を作るまいと思つたです。何んぼ作つても負ですからな、殊にこの句なんか何も知らん人間、川柳のせの字も知らん人間に見せても「ウーン」と唸りますからな

豆秋＝私も戰爭の句は作るまいと思ひます。と云ふのは戰況の再報告とか、感激の標語位なところにならずにこの大きな事實を川柳にしてしまおうと思ふと迎も苦しうてえらいと思つたからです。實際先生の「週間朝日」のなんかえらいでせうネ

某人＝それは結極、時事吟と云ふものゝ持つ苦しみですネ

豆秋＝そうですネ。消化するまでがネ！

某人＝文藝春秋の現地報告なんかでも一月間かゝつて澤山の人達が書いて、それを集めて、出來るだけ生々しい記事と云ふ事にして、出る二、三日前に何か一つあるともう昔なら二、三ヶ月か半年位前の記事を讀んでゐる位としか讀者にはとられない譯ですからネ。

豆秋＝文樂が生命の短い大江兄弟のものを扱かつたやうなものですネ。あれを文樂畑のものにするには大變な努力が要るものと思ひます。この前にも肉彈三勇士を扱かつた事がありますが、今某人さんがおつしやつたやうに生命が短いと云ふか、段々印象から

お隣組の名物婆さん

大山露斗

私の隣町に、一風變つた齊藤と名乘る七十婆さんがゐる。この婆さんたつた一人の侘び住ひだが、頗ぶる元氣で赤色の交平生地不明、上は縞物で、大阪で云ふ舊平を着込んで、ボロの箱車さつさとつゝぱり、朝の早いことは近所での一番、それもあけの元旦から晦日まで一日中市中を押し廻り、品物を何かと拾ひ歩くのである。日の出へは土下座で五分乃至十分間、今日の無事を眞言宗のお唱へで祈り、丁寧な折りは大聲で、「有難いこつちや」を口癖に云ひ、「あつはつはアー」と子どもが虫でも起しそうな聲を出すので町中の名物となつてゐる。

この婆さん、この町に住んで二十年近くになるが、上水道は贅澤だ勿體ないと云つて口にせず、水道稅は掛けつぱなしである。國防獻金は拾ひ物で得た金で隣組でも、いの一番だ。八百屋へ出かけて買物をするのに、「なるだけいたみかけた品有りませんか」と貫ひ漁るそうである。すの入つた大根をただのやうな安い値で買ひしめ、それを刻んで干して寢起の出來ぬ位積みあげ、半島人やお得意へ賣つてゐるのだそうだが、それも又安いのでせわしい位に日を送つてゐる。それから毎朝二合何がしかの配給米を炊いて佛壇へ供へる。酒好きへは十五六べんも二十べんも酌いで供へるそうであるが、そ

遠ざかるやうに思ひます。

丹路＝時事吟の總體論のやうになつて來たね。

馥乃＝結極戰爭の句は難句になるのが多いですネ。

丹路＝將來に於てネ。

路郎＝それは句の多くが事件的に取扱かつてある關係であつて、その事件そのものが社會から或は社會の何一〇％から忘れられてゆくのに原因するのである。その點古川柳に於てもその當時の事件を取扱かつたものはその當時の風俗、人情、並びにその事件の內容に就いて知らないものは全く難解の句となるのである。現在でもABCDのAが何國を代表し、Bが何國を代表してゐるか知らない人にとつてはやはり難句であつて、この句を讀んでも直ちに感激は湧かないであらう。こう云ふ方面の事を詳しく說明するには時事論の一般に就いて語る必要があるが、それは嘗て本誌の第一卷四號に「時事吟に就いて」を書いてあるからそれを讀んで戴くことにする。同じく時事と云つても今度の戰爭に依る時事吟は一億國民が非常な感激から殆んどの人々が關心を持つてゐるので、その點難解さは比較的尠いと見ていゝだらう。尤も句の消化されてゐないものに至つては論外である。今、句の消化と云ふ事に就いて述べたが「モヤモヤが一度に晴れたみことのり」の句の如きは、この大戰に際し宣戰布告の詔勅を下された事を詠んだ句として最右端に屬する句として推賞したい。支那事變勃發以來一億國民の「モヤ〳〵」と云ふものが如何に大きかつたかと云ふ事を思へば、この句の「モヤ〳〵」と云ふ用語が非常に力强い句語となつてゐる。

豆秋＝句の消化と云へば、鋭々さんの「演習か等と米兵また寢呆け」等は、ハワイ海戰を巧みに川柳化されてゐると思ひます。

某人＝それから同じ鋭々さんの「朝の髭剃らず米兵爆死せり」なんかも穿ち得て妙と云ふ可きでせうネ。

豆秋＝私思ふんですが句は時局に餘り便乘し過ぎてもいかんのだと思ひます。如何ですか丹路さん。

丹路＝今度の戰爭川柳に關してはもう豆秋さんが既に卓絕した作品を發表し且つ推賞をうけつゝあるにもかゝはらず、其御本人から斯う云つたことばが出ると云ふことは、これから戰爭川柳を作らうとする人達にとつて餘程よく考へなければならない點だと思ひます。豆秋さんにして時事吟のむづかしさを感じられるんだからとても僕は作れそうにもないなあと考へてゐたところです。それに今迄提出された句の傾向をみるのに、それはもうあの詔勅が渙發された當時の一億の實に正直な國民的感情がどの句にもまるで子供のやうに素直に出てゐる事は買うんですが、斯う云つては誤弊があるかも知れませんが一脈どうも芝居や野球を觀つゝ痛烈な野次を飛ばす小氣味よさ、と云つた式に、それにつられてばつ〳〵と作つてしまつたやうな氣配がするんです。それで時事吟の生命の長短と云ふ事はいつに變らぬ國民的感情が句に出て居りしかもそれが座興でなく、深い意味での一億一心如何なる苦難も耐えて行く國民的感情を充分にうちらに燃燒させてそれから句を作る身支度をしなくちゃならないと思ひます。

馥乃＝「みことのり」と云ふ言葉に對して「モヤ〳〵」と云ふ言ひ方はそぐはない筈であるのにちつとも非禮であると云ふやうな感じの起らないのは要するに「モヤ〳〵」と云ふ僅かな言葉自體が一億國民の熱意を現してゐるからだと思ひます。

路郎＝大體「川柳塔」の作家達には人が摑んだ題材が面白いから自分も作つてみやうと云ふやうな所謂便乘的な作句態度の作家は居ない筈であるにも拘らず、二月號の「川柳塔」だけでも戰爭に關する句が三六％も占めてゐると云ふ事は決して便乘的に作句したのではなく、その題材が作家各自に共通した大きな感興を喚んだのである。この場合一寸見て便乘であるかの如く見える句はどこかに表現上の不足から來た缺陷が、そう思はせるやうな句を構成したのであらうと思ふ。先程から戰爭を詠んだ句を作ると云ふ事は非常な勞作であるからと云ふ回避的な言も出たやうであるが、マレー作戰に於て、ジャングル戰の如き日本人として嘗つて見ない闘を續けて戰果を擧げてゐられる將兵に對しても私達は苦吟、勞作をいとはないで一億國民の感情を搖ぶるやうな佳吟名句を吐いて奉公の一端とする覺悟がなくてはならない。（アート筆記）

の供へるのは佛樣ではなくて、自分が見送つた兵隊さんへ供へるのである。そして禮拜が濟むと、冷えたのを喰べて一日の日課にボツ〳〵御出動になるのである。戻り道で、水道でも洗濯物をしてゐるおかみ連中を見ると、「やれ勿體なや〳〵」を繰りかへすのである。

十年前ごろまでは、番衆社の夢路氏宅の近所の榮座といふみぶり芝居の役者に凝つて、毎晩々々思ふ役者へ肩入れに通ひ、二十目にとう〳〵敷島一個で緣の懸け橋、わたしの家へ毎夜石の役者が來るとかなんとか語してゐるところを見ると、有難屋であるのやら少し變なのやら、其の筋からの表彰狀ものやら、全くの愚人か判斷の出來ないお婆さんなのである。（終）

地域職域の
國民貯蓄組合に
利源配當附保險を
日本生命

川柳・シナリオ・線畫

戸田孤蓬

妙な取合せだと思ひませんか。ところでこれが、有馬土産の組木細工の樣にきつちりと組上ると驚く可き鋭利な武器としてその威力を發揮する。尤も一つ一つ皆一騎當千のつはもの揃ひだが。ブルータスやシセロの雄辯術の種も或はこの邊にあつたのではないかと思はれる。

こゝに「買溜するな」と云ふテーマがある。

〃花婿の買溜らしい靴が
なり〃　生々庵

この句を分析すると

花婿、靴と云ふ二つの名詞と、の、が、の二つの助詞と鳴るの活用形である鳴りと云ふ動詞と、買溜らしいと云ふ推量の形容詞とに分れる。

國策に沿はない蜻蛉頭の花婿、純毛の洋服の折目を氣にしてゐる花婿。それから靴、鳴ると云ふ動詞で如何にもおろし立ての感がする。この靴に買溜らしいと云ふ形容詞をつけたのは配給品や代用品とは見えない色や艶があり、おまけにギュー〳〵と鳴るからだ。衣料切符になつてもノー・ソックスなんてやれた眞似はようしないからようやく靴下の穴を繕ふくらひ、これだつてうんと買溜してゐるから新品に事缺かないかもしれない。

それだけで彼の家庭生活、社會生活が浮び出る。

「この一戰何がなんでもやり拔くぞ」のポスターの前に立たせて御覽うじろ。並んだ花嫁さんは案外モンペのはき方が上手いかもしれない。

そうなればその颯爽は全くの泣き笑ひものだ。

そつくりそのまゝ紙芝居に仕組んで翼賛隣組常會に掛ければ間違ひなしの大成功請合一〇〇パアセント。

同じ距離からばかり眺め、臺辭を喋らす舞臺ものではものにならない。遠寫は中寫に大寫とこなければ嘘だ。

頭に蜻蛉を、頸に麒麟を、顏に猿を組合させ、その都度勇敢にその焦點の中心に突込むレンズがなければならぬ。勿論ポスターやモンペの花嫁を花嫁にダブらせる。それから環境描寫として、買溜の山をかゝへて歸る姿、買溜がしこたま詰め込んである押入れ、反對効果として空つぽのショウウインド、買物の列など適當に挿入する事も必要だ。暦が春夏秋冬移り變はる生物で時の經過を示しつゝ、ボロボロになつて行く同じ着物や靴をつけた同じ男を重ねたら尙更滿點。

そうして出來上つたプランをフィルムに再現出來たらだが、せめて漫畫の流儀で簡單な線畫ででも描き並べてごらん。一文不知の尼女房だつて買溜がよいか惡いか問ふには及ぶまい。

之は川柳そのものゝ觀賞の分解となり之を逆に歸納すれば川柳作句の手引となる。

之を此の順序で挽肉にしてこね合せたら誰の腹へでもしつかり入る。

昔の西哲コペルニクスは地が動くと云ひ出した。その頃の一般の人は地がじつとしてゐて天が動くとばかり信じてゐたこれをコペルニクス的轉回とか百八十度の轉回とか云ふ。

永年の算盤人から一朝にして教壇生活をはじめたばかりの私がコペルニクス式轉回を完成すると同時に縷々述べて來た樣な繰言を新らしい仕事に對する抱負として亦方法論として發表した。

これが案外、口のまわらぬこの俄か盲を勇氣づけた。この調子でチツチパツパをしようと云ふのが私の念願である。今白墨と取ツ組み合つてその秘術を實施しつゝ研究しつゝ練習してゐる。

私を川柳に東道して下さつた中島生々庵氏の好意に報ゆるに玉句の無斷引例を敢てした。又川柳と云ふ茨の道にジヤングルを開く鐵牛の役目をはたして下さつた麻生路郎先生に深謝して私語放談を終る。

——二六〇二、二、一〇——

同舟近詠

松山　前田五健

ト云つて座つて居れぬ戰捷だ
やりますと人間魚雷子も望む
王手〳〵香港マニラシンガポール
神國は起てり火の瀧火の流れ
春の精あつめたやうに椿べに

朝鮮　池田可宵

皇軍に密林もなし雨もなし
日本はお百度をふむ女から
夫人の句男に思ひあたること

兵庫縣御影町　長崎柳秀

休閑地こゝは子の畦親の畦
呑口の音さへ春は春らしく
引眉の仕上げを見てる不孝者
沈思默考やがてあんたは嫌ひです

餞別はこれだけでいゝ日本刀
入試パス帽子の新で子は戻り
淺ましき姿諸屋の人の群

奈良縣　嶋田翠峯

二月五日愛妻を亡くして
一云へば二を知る妻に先き立たれ
灯を替へてやれど答は更になし

骨上げ

子供等の箸にかゝつた佛さん

神戸　潮田明坊

豆債券映畫はやめて來たと云ひ
寢正月捕物帳が枕もと

長野縣須坂町　高崎柳兒

銃後引受けた老眼しかとかけ
金策の弱身へ懸引見すかされ

山口縣　三原狂路

地卵を喰べて病勢はかどらず
みかんむく女の指は惡魔めき

善通寺收容所

捕われの憂愁もなく唄ふ俘虜

名古屋　鈴木可香

停年へ三十年の妻があり
腰へ手を置いて體操教師なり
金があつて水道のない丘に棲み
朝の體操は寺から空地から

扁桃腺炎
感冒
中耳炎

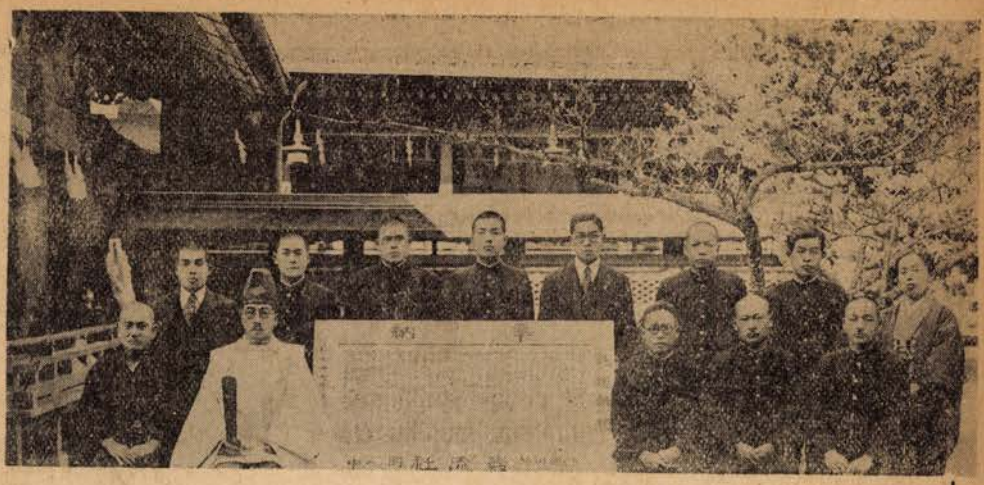
化膿性疾患の
内服短期療法

扁桃腺炎、中耳炎、流行性感冒、丹毒、面疔、淋疾…その他化膿症に對し、アルバジルは内服により、直接その病原菌を克服、短期間に治療を促進し……
一、發熱、疼痛、分泌物の消退
一、再發の防止……等の目的を達成せしめ得る！
殊に、品質優秀にして副作用少き点＝使用の安全性＝は本劑の大なる長所である！

包裝・二十錠
五十錠・百錠

アルバジル錠

發賣元　山之内藥品商會　東京・大阪



戰捷祈願川柳會（下關）

寫眞は前列向つて右より半休、鯛好坊、市多樓、（優秀句奉納の額）宮司、米三一後列キクノ、恒生、游記、靜月、光輝、哲志、稻波、潮流の諸氏

ジーベの協川 柳界展望

催

▼本社句會は七日夜五時半御津八幡宮で開催▼松坂倶樂部麻生路郎川柳講座は一日・十五日午後一時▼有恒倶樂部川柳講座は十二・廿四の兩日、尙廿四日は講座の第百回に當るので會場は堂島の百姓亭、兼題は「百」他四題、出句數も各題二十句宛計百句、と總て百に因んだ趣向で盛大に記念された▼阪大川柳會は十七日午後四時▼警察病院川柳會は五日午後五時▼四ッ橋川柳會二月例會は十三日市電四ッ橋分室に於て開催▼川雜下關支部では一月廿五日長門國官幣中社住吉神社に於て戰捷祈願川柳會を開催（上段寫眞參照）又同支部では市多樓居に於て二月七日例會を開催▼川雜尼崎支部二月例會は廿二日午後六時尼崎昭和莊に於て開催▼川雜三池染料支部（大牟田）では一月廿六日早鐘講堂に於て連捷祝賀川柳大會を開催▼松江遞友銀輪川柳會（松江）では二月十二日夜六時松江遞信診療所で例會を開催。

消息

▼三月十四日西日本鐵道人川柳大會（川柳人協會後援）が廣島鐵道倶樂部に於て開催の運びとなつた。尙當日は路郎主幹出席講演される▼福田山雨樓氏（不朽洞會員）は二月二日東京を出發北海道に赴かれた同月中旬歸京の由▼安川久留美氏（金澤）は一月廿五日小田原より來信▼川柳大陸社（大連）では「川柳大陸」二月號紙上で大陸の柳友諸氏に協力を求め皇軍慰問誌の基金を募集されてゐる、川柳報國を旨とする同士にとつて同感に堪へない▼小畑自有浪氏（不朽洞會員）は兼ねて「明朗大陸」誌上に「川柳雛子」の事を執られたが其後も毎號連載好評を博されてゐる▼永田里十九氏（不朽洞會員）は退院後經過良好で殆んど全快目下自宅で靜養中▼中島生々廬氏（不朽洞會員）は一月末日東上、同氏の社會事業「富士高原兒童養護道場」を視察される文部省普通學務局長を案内された▼酒井斗風氏（不朽洞會員）は舊冬より闘病生活を續けられてゐるが其後病狀良好の由「常會の話病人ほつとかれ」の句を寄せられた、全快の一日も早からん事を祈る▼不朽洞會員戸倉雪天、奥村丹路、戸田孤蓬、魚住潮溯、植山九天鈴木石鼎、高田抱翅、河野夜王の諸氏等、其他の方々はいづれも川雜慰問誌の普及に努められてゐる▼岡村和郎氏（尼崎）は目下入院靜養されてゐる由全快を祈る▼水谷竹莊氏（大阪）は滿洲方面を旅行、ハルビンより「一寸だけ滿語覺えた汽車の中」の句を寄せられた二月末日歸阪の由▼中村松四郎氏（布施）は路郎主幹の命名に依り柳號を聖司とされた。

慶弔

▼松浦帆船氏（大阪）は二月三日華燭の典を擧げられた。

▼奥野其奥氏（大阪）は二月十三日永眠された謹悼▼石曾根民郎氏（不朽洞會員）の令弟武郎氏が二月六日逝去された謹んで悼む▼嶋田翠峯氏（奈良縣）の令閨が二月五日他界された哀悼の意を表する▼湯本白庵氏（大連）は舊冬十九日永眠、謹悼

轉居

▼矢野赫堂氏（不朽洞會員）は松山市萱町二丁目七七へ▼佐伯鶏城氏（愛媛縣）は岡山市福田三〇八福田雛鶏場内へ▼村治紫津氏（大阪）は吹田市吹田驛道診療所内へ▼山野一角氏（金澤）は金澤市長土塀通四三山下清八郎方へ▼平井流舟氏（大阪）は大阪市東區舟橋町六五中音楠方へ▼多田海朗氏（下關）は北鮮羅津國際ビル正勇寮内へ▼小林ヒデオ氏（朝鮮）は兵庫縣佐甲郡暮山村福中へ

正誤

▼一月號三〇頁二段二〇行目（人）の句は「落しもの昨日の道をまた歩き一銳々」と訂正。

★社の回覽板へ

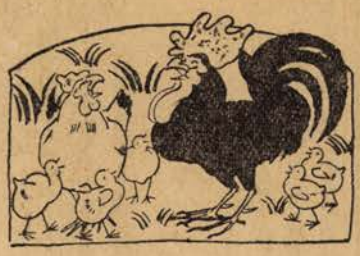
▼川雜熊本支部（熊本）が新設された、幹事は藤本水源氏▼川雜仁多支部（島根縣）が新たに設けられた、幹事は新出谷一磨氏川雜松江支部幹事更迭、舊幹事勝谷山川兒氏に替つて、田中將雄氏が新たに就任▼武部香林坊氏（鮎美氏紹介）上田翠光氏（覆乃女史紹介）が不朽洞會に入會された。▼石野秀雄氏は已むなき事情により一時不朽洞を退會された

戰捷第一次祝賀句會

一7日（土）一

★三月七日（土曜日）午後六時
★會場　御津八幡宮（電南八六四〇）南區八幡町佐野屋橋筋角
★兼題　「厩足」　麻生路郎選
　　「降伏」　須崎豆秋選
★講演　路郎・孤蓬・白面人

主催　川柳雜誌社



七號室雜記（へんしつしつから）

▼英帝國の東亞に於ける根據地新嘉坡が二月十五日陷落した。皇軍の赫々たる戰果には一億國民の手の舞ひ足の踏むところを知らない欣びであつた。占領後のシンガポールが十七日には昭南島と改稱された。十八日には祝賀行事が行はれた戰ひはいよ〳〵これからであることを忘れてはならない。

▼本號の表紙「護れ大空」は福井哲氏の友人、一村巖氏の力作である。前號同樣の好評を期待してゐる。

▼柳界の至寶、「武玉川四篇研究」は四篇研究だけでも既に二十八ケ月の連載である。蛭子省二氏が病をおして、研究と清記の勞をとられたもの、あと一二回で四篇研究の發表が終ることになり、既に三氏によつて五篇研究に着手されてゐる。

▼「大東亞戰の句を語る」は二月六日の夜、丹路、豆秋、某人の諸氏と覆乃と小生の五人が、社で膝を交へての收穫である。斯うした時局色濃厚な川柳は題材がナマ過ぎるので、藝術味の稀薄はまぬがれぬが、痛烈に穿ちは出せやうと思ふ。しかし穿ちの辛辣さも、迫力もない標語めいた凡句の氾濫は曩持ちならない。

▼本號は隨筆で賑つた。笠原路生氏の「川柳二句」、小山文三氏の「丹波の狐」、鈴木石鹿氏の「川柳にうまを拾ふ」の續稿、大山露斗氏の「お隣組の名物婆さん」、戸田孤蓬氏の「川柳・シナリオ・綜藝」等々多士濟々を思はせられる。

▼北川春巢氏の「川柳草津溫泉」は筆者が刀圭界の人であるだけに、醫者の立場から觀た溫泉に、配するに川柳をもつてしたもので興趣が深い。

▼私達にとつて川柳を創ることは大きな欣びであるが、川柳を解說することは容易ではなく、甚だ苦痛とするところである。しかし、苦痛であるからと云つて、それ等の解說をいつまでもなほざりにして、誰も手をつけないといふことは道のためでないと思ひ、「初等川柳講座」に筆を執ることにしたのである。そして、その名にふさはしいやうに、出來るかぎりくだけて具體的に書くことにした。極く平易に通俗に、誰にでも判るやうにといふ意味から餘りに判りきつたことまで解說をしてゐるがそのうちにも、新味は出してゆくつもりであるから、古い作家たちも一ト通りは眼を通していただきたい。そこには必ず頷いていただけるものがあらうと思ふ。

▼須崎豆秋氏の「其奧を甲ふ」は後輩を懷ふ豆秋氏の眞實味が出てゐる其奧と改號してからの彼よりも禿山と號してゐたころの彼に親しみをもつてゐた人が多かつた。川雞、萩の茶屋支部の幹事として隨分熱心でもあつたし、私の玉出時代にはよく、私の家を訪れたもので、そのころ一杯機嫌で、南洋の歌を得意になつて謠つたものだ。日本が南へ延びた今日このごろ、禿山のことを思ひ出し愚妻とも話してゐたところへその訃報を聞いた。あまりにも、突然なのでまだ禿山が死んだといふ氣がしない。

募集句　一路集

戰鬪帽　沒食子選

甲種合格戰鬪帽に肩を張り　駒志希
戰鬪帽未だ硝煙を臭はせる　三司
戰鬪帽興亞を背負ふ氣でかむり　清富
飾られた友の殊勳の戰鬪帽　治男
こう被る癖を戰鬪帽叱る　正司
當會の役員として戰鬪帽　春童
呉服屋の番頭いつか戰鬪帽　同
ほゝえんだ顏戰鬪帽の目に殘り　臥牛
戰鬪帽で來たのが道を問ふ役目　一聲
戰鬪帽のまゝで刑事にひつぱられ　香桐
戰鬪帽赤道直下で輝返し　同
老社長戰鬪帽で擧手の禮　三丸
戰鬪帽今日は再起の身へ被り　千斗
歸還して戰鬪帽で社に通ひ　同
勤勞班みんな揃つた戰鬪帽　青史
吊革の下戰鬪帽の竝ぶ朝　光葉
在りし日の戰鬪帽は頂かれ　武士
必勝を胸に征く〳〵戰鬪帽　同
戰鬪帽野戰歸りの色もよし　祥月
汗じみた戰鬪帽の酒の味　同
工場へ戰鬪帽のつゞく朝　不二
戰鬪帽今日働いたゞけ汚れ　同
召され征く兄は大きい戰鬪帽　子盛
戰鬪帽で隣組長若くゐる　正史
戰鬪帽征く途に起つ旗の風　浪二
戰鬪帽二つ三つは若く見せ　臥牛
春雨に戰鬪帽がぬれて來る　青史
隣組戰鬪帽も揃つてる　武士
行軍にへこたれませぬ戰鬪帽　不二
戰鬪帽脫ぐと意外な歲と知れ　同
戰鬪帽苦勞の汗をにじませる　藤樓
轉業のペタルも輕い戰鬪帽　天風
メガホンも戰鬪帽もぬれて消しとめる　抱逸
戰鬪帽で撮し故鄕へ初便り　十四之
此の戰鬪帽俺とマレーへ來てしまい　三味
戰鬪帽馬の匂ひもしみて居り　障子
戰鬪帽もう俗界を超越し　吐空
戰鬪帽言葉荒くてそれでよし　鷄城
軍犬が戰鬪帽をくわへて來　綠草
亡き友の血汐が殘る戰鬪帽　尙代
戰鬪帽油で光るまゝも好し　紀川
モンペイと戰鬪帽で式を擧げ　詩朗
戰鬪帽尊い汗が染んで居り　敏郎
戰鬪帽同じ訛の肩を組み　海朗
戰友と戰鬪帽に別れる日　照二
戰鬪帽紅一點も冠つてる　香林坊
五分刈の寒さを言はぬ戰鬪帽　太郎
戰鬪帽後引受ける眉太し　杜的
戰鬪帽再起の汗を義手で拭き　美奈都
總力へ父まだ老ひず戰鬪帽　牛步
生甲斐を銃後へ强く戰鬪帽　寫王
眉宇に決意あり戰鬪帽　香林坊
椰子の木蔭にペンを走らす戰鬪帽　可學
スパイではない人相の戰鬪帽　小城子
屋臺壽司戰鬪帽が二人立ち　浦島
下駄履が案外似合ふ戰鬪帽　八重
(佳)雁の巢に着いた閣下も戰鬪帽　品枝
(佳)戰鬪帽おとぎの王と握手する
(佳)賴もしい顏だと思ふ戰鬪帽
(佳)戰鬪帽生存したが奇蹟にて
(佳)戰鬪帽子供を寄せる職を持ち
(佳)青春がピツタリ似合ふ戰鬪帽
(佳)戰鬪帽夜店の植木さげて來る
(佳)萬歲は戰鬪帽を鷲掴み

▼小畑自有浪氏のお隣組のためのお座敷芝居「公園夜話」は、ます〳〵筆が冴えて、單なる時局向き脚本ではない。道頓堀あたりで、上演しても相當の入りを豫想し得られる作品である。

▼拙稿「吟行地圖べ大和篇」が本號から連載されることになつた。新嘉坡陷落の欣びの中で、日本建國の發祥地である大和篇の執筆は私の頗ぶる欣快とするところであり殊に本號は神武天皇を祭祀する橿原神宮に關する發表ではじまることもうれしい

▼前號「川柳寫眞」の一等當選者無名氏が小川恒明氏であることが、同氏の通知によつて判明した。本號の一等當選者は清水白柳氏である。

▼二月八日の日曜日に、葭乃と二人で、橿原神宮を中心に、久米寺や、八木町の町などを歩き廻つた。雪がちらついて、隨分寒い日だつた。手がかぢかんでペンが思ふように運ばないので少しく早く切りあげた。橿原の驛前で庄萬よし氏に會つた。

▼二月十五日の日曜も朝からばらばら雪が降つてゐる。珍らしく庭の樹々が白い。私はいつもより早く宅を出て、天王寺高女の講堂で催された文樂座有志上演の人形淨瑠璃を觀たあの太三味線の音色を聞くと私の魂は一種の飛躍を感ずるのである。殊に技神に入る人形の動きには全く魅せられしまふ。そして上演に先立ち桐竹紋十郎氏が、人形をバラ〳〵にして解說された勞を多としたい。午後、松坂倶樂部の川柳講座で、この文樂人形所感から川柳構成上の講話をした。

▼私の無帽時代はかなりながく續いたが、一昨年の春に、娘がお父さん帽子を冠むんなさいと云つて、ロンドン製のソフトを買つて與えたので私は無帽時代に別れを告げ、その後ぶッ通しに、それを頭に戴いたが、最近フト戰鬪帽を買つたので、それを冠つて毎日出社してゐる。電車などで顏をのぞき込むやうにして、聲を掛ける人が、よく似てゐられるが戰鬪帽をかむつてゐられるので人違ひでないかと思ひましたと云はれる所謂宗匠が宗匠帽をかむつた時代から見れば隔世の觀があるが、時局柄戰鬪帽を冠むると、自ら戰鬪意識がモリあがつて來るやうな氣がして、愉快だ。これは中河與一氏のフォルマリズムを肯定することになるが、日本精神を發揚する意味から云つても、平時でも日本人は袴を穿くやうにしたらいゝと思ふ。（路郎生）

新會員を募る

松坂倶樂部　川柳講座

▼新體制下の常識として川柳を知りたい人▼趣味として川柳を創作したい人▼從來作つてはゐるが、よい指導者がないので一向進歩しないと思はれる人々は▼松坂屋（日本橋筋三）の七階にある松坂倶樂部の麻生路郎川柳講座へ入會されたい。講座は月二回、第一、第三日曜日午後一時から開講（作句・添削批評講義等）會費一ヶ月一圓・入會希望者は七階の倶樂部受付へ申込まれたい。（川柳講座幹事）

腕

夜王選

良い腕で居ってやつぱり食べるだけ　詩朗
增産の腕は額の汗を拭き　品枝
失墜の底から湧いた腕ちから　春童
「兵隊ぢや」孫の重さが腕へ來る　不二
腕利の看護婦冷たい人にみえ　邦夫
腕を組んだが算術は出來ぬなり　浦島
學歷と別にすぐれた腕を持ち　カズヱ
病む父の昔の腕と思はれず　祥月
聖戰へ少年工の腕も鳴り　美奈都
回復期時々腕を出しては見　小城子
腕が鳴る兵種へ今朝のよい便り　廣
腕組んで思案に餘るあごを撫で　カズヱ
腕自慢後には引けぬ羽目となり　三司
この腕できづき上げたと藏を指し　千斗
庖丁の自慢へ鰯ばかりなり　障子
休閑地鍬を持つ腕あたゝかし　香林坊
まだ腕に年は取らぬと柔道着　綠葉
太平洋を夢に見てゐる腕が伸び　十四之
御慰問へ白衣の腕は膝の上　正司
二の腕にからむ日向の洗ひ髮　吐空
良い智慧浮かばぬ腕を組み合せ　同
辣腕の主とは見へぬタキシード　鷄城
細腕に靴打つ如く子が生れ　清富
あつぱれな榮譽の蔭に母の腕　同
左腕再起の筆を持ち習ひ　邦信
未教育腕がなつてる姿なり　葉光
大休止椰子の葉蔭の腕枕　一聲
銃後鐵壁默つて腕を見せ　敏郎
看護婦の行司白衣の腕角力　杜的
永遠の片腕となる妻若し　彌生
病院船輸血を圍む白い腕　若栄
この腕でこの魂で鋲を打ち　武士
商賣となれば米屋の腕つ節　葉知朗
恩給の戴く腕をそつと撫し　一聲

ハワイ空襲

待つだけは待つ氣になつた腕時計

この秋をあゝこの秋を待つた腕　八重
三十になつたと腕に言ひきかせ　綠葉

(人)飛びついて腕に下がつた子の重み　三味

「お父さんお歸り」おゝ坊や戰爭ごつこしてたのか
一寸抱いて上げよう、おつとゝ重いね、良いか坊や
元氣に遊んで早く大きくなつて立派な軍人になるんだぞ。ウンとうなづく子の頰の林檎の如き艶やかさ
あゝ頼母しき二世達よ。

(地)腕つ節見せて元氣な父殘る　若栄

ああこりや何を心配するのだ。後の事を心配しなくともよいぞ、年はとつてもまだお前達には負けないつもりだ。この俵を見ろこれ位の力はまだまだあるのだ。芽出度い門出だ笑つて立派にお國のお役に立つてこい。流石は帝國軍人の父、出征の息子をはげまして銃後はしかと護られたり。

(天)たくましき腕を隱した作業服　詩朗

時局を知らぬにあらず、情熱無きにあらず、されどいたずらに力む事の愚を悟り默々と機械を磨く作業服は汗と油に汚れたりともお召を待つ魂は、腕は、ひそかに來る可き日を期してゐるなり。

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿清規▼用紙は原稿用紙▼文字を正確に▼閉幕月日及編所記入▼締切は毎月廿五日▼投稿先は本社宛

本社二月例會

二月七日　於　御津八幡宮

二月七日夜本社二月例會が御津八幡宮で開催された。折柄の寒さにも拘らず、作句精進に熱心な方々が早くから詰めかけられた。吐空氏の如きは三十八度何分の高熱をおして出席された。默平氏も久し振りで顔を見せられ桂風氏の出席も珍しい事である。當夜の兼題は「衣料切符」に「敵」演題は輝かしき我海軍に因みある「日本海軍史」である。講演者は先に二千六百年史を刊行され、近くは「川柳雜誌」誌上に「軍艦史」「世界史」を發表されてゐる戸田孤蓬氏である。先づ日本海軍の歴史を語る前に、太古のくり舟時代から日本の戰舟の榮枯盛衰を表にした朱線をもつて物語り、戰舟の形の變遷などは逐一黑い切紙で製造されてゐた。孤蓬氏の說明につれて、アッシスタントの紫香氏は唐舟だの、御朱印船などを一つ一つつまみ上げてピンでとめゆくのである。バックが南洋方面の地圖にかはつて話はいよ〳〵佳境に入り、我祖先が南洋へまで進出して行つた時代に及び、和寇のエピソードで最後を結ばれ拍手喝采のうちに降壇、次いで席題兼題の披講、川柳寫眞の作句で淺春の夜を川柳味滿喫、なほ一月句會に於ける川柳寫眞當選者は小川恒明氏で第二位が酒井美知夫氏であつた。當夜掛額用の櫓上グライダーの引伸寫眞を當選者に贈呈した。（葭乃記）

出席者（順不同）

路郎・翠芳・鮎美・三司・治男・吐空・かほる・阿瀧・不二・絲雨・香林坊・孤蓬・水客・桂風・弘・唯男・紫香・子紋・九一・平行・默平・彌生・翠光・文雄・六龍子・恒明・白柳子・滿潮・葭乃・田中

兼題「衣料切符」　路郎選

衣料切符今ぞ夫人の腕だめし　節女
入院へ衣料切符は手放せず　香林坊
衣料切符鋏を持つて待機する　水客
裏樣も女中も百點氣持よし　平行
百點を殘す工夫を社長もし　小城子
十點がとこ破つたと蹈つて來　吐空
安產の双兒に屆く二百點　鮎美
點數へ名案がある主婦の友　白面人
衣料切符亭主は拜む氣で眺め　翠光
衣料切符主婦のふところから覗き　滿潮
デパートで母娘は衣料切符使ひ　三司
點數を考へぬいて裏も買ひ　絲雨
百點を着るにスフあり絹紗あり　香林坊
軍事便衣料切符の事も書き　六龍子
衣料切符賞與へしばし待機する　不二
五百點エンゲージリング手で貰　水客
點數になつて山の手住み安し　吐空
金の高言はず點數だけ惱み　桂風
五十點切取り乍ら世辭になり　水客
いゝ空氣吸うて點數二十減り　路郎

兼題「敵」　白柳子選

もう敵と呼ばれたくない俘虜笑ふ　小城子
大本營發表又も敵前上陸し　恒明
空腹の敵が機密をみな喋舌べり　白面人
降服の早さに勇士拍子拔け　節女
小敵はにらんでおいて機は蹈る　九一
殘敵へ追ひ打つ砲に夕陽する　紫香
敵艦へ大和魂ブッつける　平行
敵機まだ本土に見えぬ有難さ　吐空
敵陣がレンズに寫る河の幅　阿瀧
蕭々と輸送船團敵を呑む　不二
朝飯のとこを敵陣襲はれる　滿潮
敵の記者明日のデマを考へる　治男
敵領と思へぬ波のおだやかさ　文雄
敵の捕虜自國のデマをまだ信じ　平行
捕虜笑ひ〳〵カメラへ寄り添うて　桂風
敵性のニコ〳〵として手を擧げる　水客
降伏の敵をいたはる陽が溫し　鮎美
敵主力鯛といつしよに逃げる泡　同
夜行軍馬も敵地と心得て　文雄
休む日を休んで挑む氣が可笑し　香林坊
朝の陽に敵もさるもの踊つてる　鮎美
神速果敢敵も見惚れる鮮かさ　白柳子

席題「馳足」　鮎美選

馳足へ負傷の足も頑張りぬ　默平
馳け足のリズムに消えた屋の數　子紋
馳け足で出る營門は雪が降り　翠光
馳け足に鍛練の朝があけてくる　治男
馳け足の野原へ蝶の亂れ飛び　吐空
馳足で父に渡した忘れもの　彌生
馳足のしまひは話し話しくる　紫香
馳足は薄紫の森を拔け　孤蓬
馳け足の先頭をくる娘のモンペ　水客
馳け足の足も揃うて寒の入り　滿潮
馳け足の途中に好きな匂ひする　鮎美

席題「象」　水客選

童謠で象を取卷く幼稚園　鮎美
戰利品象も一頭二頭居る　滿潮
芋を象邪魔くさそうにせず拾ひ　默平
象便ひ鼻に卷かれて得意なり　恒明
象の耳鶴が歩いて登るなり　紫香
日の丸がはた〳〵象のゐる景色　孤蓬
進軍へ象あるだけの力出し　平行
長政を大象小象にいひつたへ　孤蓬
物足らぬ氣味で進軍象に乘る　桂風
日本語に動いて呉れる象もゐる　滿潮
象のゐる戰線二月の陽の眞下　水客

席題「人違ひ」　五選

人違ひ肩を叩いて念が入り　桂風
十字路に良く似た母の影を見る　吐空
人違ひそれから話はづむなり　香林坊
人違ひ其の儘横の席にかけ　紫香
人違ひ煙草の灰を落される　水客
人違ひ成程少し派手な人　子紋
人違ひマスクをはづしぞんになり　かほる

雜川　梅田支部句會（大阪）

水筒へ半分殘す友の分　治男
友情を賴り玄關で待される　三司
醒めてから友情少し違うて來　紀川
燈台へ大きく廻る水上機　鮎美
燈台の溫き部屋なり吹雪の夜　同
燈台のとこまで行つて引返し　三司
燈台の人も船見てゐるのなり　紀川
燈台は海から陸から親しまれ　綠葉

煤拂ひ小笹手近にあるくらし　同
煤拂ひ蜘蛛は欄間をうまく逃げ　同
煤拂ひ道化役者の顔に見え　治男
親と子が祖先を語り煤拂ひ　榮坊
居候煤拂ひの日は寫ばれ　蘆光
學生ののんきさ上へ上へ伸び　綠葉
學生は酒の肴もたゞ議論　吐空
學生の樽はたゝむ用はなし　三司
方向が違ふ宿屋の朝があけ　治男
市電から旗日の朝はあけて來る　同
溫泉の朝は女にあかるすぎ　三司
角帽しめられる朝の有難し　かほる

一月十一日　於中座
壽賀我對面

大名の顔が四角な對面壇　松山
三寶を剛つて五郎の氣が晴れる　鮎美
蝶千鳥兄弟の袖かもつれあひ　同

川雜　**堺支部句會**（堺）

一月二十五日　於貴志子居

敵未ださとらぬ岸の砂に這ふ　波夢造
天祐だ敵前上陸みんな無事　角堂
敵前上陸敵は無氣味な程靜か　葭乃
彈丸の來る上陸なれど嬉しくて　波夢造
敵前上陸母は佛間で手を合せ　坊茄子
敵前上陸たれか脊中を叩きそう　かほる
三度目の敵前上陸生き殘り　霞舍
いよ〳〵敵前上陸ですと走り書き　豆秋
敵陣の火の手上陸出來たらし　波夢造
神風と組んで敵前上陸し　貴志子
突擊の前夜新たに遺書を書き　波夢造
落下傘あゝ妻が子が眼に浮び　貴志子
さくら花あゝ還らざる二十九機　豆秋
部隊長軍旗の櫛にキット佇ち　霞舍
特務艇二度と相見ぬ暴手の禮　貴志子
役得で少々いけるやうになり　路郎
顔だけでスーツト木戸を通るなり　豆秋
停年のもう役得で家が建ち　貴志子
役得に妻はかゞやき子は肥り　同
役得があるかと伯父に尋ねられ　かほる
鐵道に勤めて旅の趣味を持ち　葭乃
級長は職員室の火にあたり　波夢造
役得で貰うた菓子に虫がつき　一瓢
役得でどうなりこうなり暮すなり　角堂

川雜　**尼崎支部句會**（尼崎）

一月三日　美知夫報

日本髪やさしき母にむかへられ　加久榮
日本髪結うて返事を待つばかり　寄眞史
社を辭める娘の日本髪取りまかれ　鮎美
缺勤をせぬ約束で初出する　寄眞史
初出勤たしかに判が押してあり　綠翠
朝の膳今日は初出の湯氣を立て　辛雅
初仕事通勤服のしわがとれ　正路
國の父殘し初出の朝を出る　鮎美
占領地椰子が詩情となる兵士　寄眞史
占領へうれしく母へ便り書く　同
占領の度に新たな合言葉　辛雅
寄せ書の旗がうれしい占領地　鮎美
占領の山から雲が湧いてくる　同
占領をして軍服のつぎをあて　美知夫
占領へ煙草の味も十日ぶり　同
集金へ水屋の抽斗みんなぬき　正路
足もとの猫へ水屋のつまみ食ひ　鮎美

川雜　**四ツ橋支部句會**（大阪）

一月十四日　翠芳報

冬休み里で初雪見て驚り　秀甫
初雪に二台續いた人力車　かほる
裏返し裏らぬポケット一つ殖え　青雲
献金をして日の丸を見上げたり　翠芳
献金の譯をたゞせば涙出る　夢想
責任を果して神を祈るなり　綠雨
責任のメガホン屋はまたゝきぬ　美奈子
上陸に銃と劍とを調べて見　香山
上陸だ故郷と同じ月が出た　美奈子

川雜下關支部
戰捷祈願　**川柳掲額大會**（下關）

一月二十五日　於住吉神社

額けばあたり一面百舌の聲　牢休報
石段を下りて再び振り仰ぎ　潮流
石段のまだこの上があるらしい　游記
神木となる年數を雨嵐　牢休
奉納の日本刀が錆びてゐる　米三
奉納の額は時代を踏んだ色　牢休
奉納の舞處女であり無垢であり　市多樓
ABCD進軍の足は揃はず　哲志
進軍へ草木も靡く日の御旗　勇記
出陣の日本刀へ映る顔　關京
征けぬ身のせめて祈願の列に入り　恒生
進軍だ亡友と行かうと又背負ひ　靜月
傳來の魂こもる日本刀　井蛙
徹夜明け無事故で拜む初日の出　草路

川雜　**小郡支部句會**（山口縣）

一月十三日　於鐵道倶樂部　井蛙報

隣りから下駄見せに來た女の子　浩
オッパイの片手は下駄へ預けとき　凡骨
泣いた子へ下駄を揃へてすかして　井蛙
父の下駄はいた坊やが迎へに出　昭宏
草相撲幟持つ子は五人拔き　游記
喰ひつめた髭が巾利く草相撲　一正
腕相撲口の達者な方が負け　井蛙
子に負けて父は嬉しい腕相撲　市多樓
戰友と呼び捨て出來ぬ供をつれ　同
戰友の髭が目に立つ小休止　恒生
戰友の癖オーライで片づける　凡平
戰友の故郷しみ〴〵汽車で見る　市多樓
戰友よお前の待つた入城だ　游記
骨背負ひ一番乘は汝なるぞ　恒生
煙草屋は刷染の顔へ二つ出し　一升

川雜　**三池染料支部句會**（大牟田）

一月二十一日　蝶人報

代筆のお隆組長の顔がたち　平人
兄の顔父に似て來る老いてくる　路村
顔を見ただけで涙が先にたち　蝶人
聞くまでもないと覺悟を顔にみる　迂咀
相濟まぬ顔が末座へ駆けつける　一葉
作戰へ勝たねばならぬ顔が寄り　三昧
卷脚絆今日は柩を持つ固さ　國雄
卷脚絆何時でも來いといふ構へ　敏一呂
聖戰はまだ〳〵續く脚絆卷く　世志一
ゲートルのよさを聖戰下に悟り　美弘
大空の護り脚絆を卷き直し　初舟
妻子無事感謝で解いた卷脚絆　波人
非常時の姿ハッキリ卷脚絆　飄水
肚でゆき今日の榮譽を擔れる　抱邊
肚決めてかゝれば切符制もよし　藤樓
頼らずに肚で交際するつもり　十四之
日獨伊ほんとの肚で手を握り　抱邊
うわついた心をニュース戒める　同
柔かい意見も母であればこそ　初舟
我過去に觸れて意見の溫味　十四之
彈丸を恐れぬ兵隊さんと馬の列　天風

川雜　**松江支部句會**（松江）

一月八日　於莞路居　將雄報

十二月八日の涙思ひ出せ　翻人
馬の目の中に凍つた三日月　將雄
海戰は大平洋の隅の隅　同
石油の雨の降る日も近い事　莞路
炬燵今ルーズベルトの話なり　榮兒
動八等父は嬉しく酒に酔ひ　遷兒
ゴム靴の夢も眞近いマレー戰　糸葉
動八等國民服をあつらへる　莞路
この地圖に小さく出てる駐屯地　快哉
十詩

徴用令思ひ思ひの部所につき　辭月
新番附やつぱり年は爭へず　同

松江合同川柳會（松江）

十二月十六日　於恩敬寺　將雄報

首腦部の或る日意外な記事にふれ　大島
首腦部の語喫がらばかりため　遽兒
首腦部は言葉少く事を決め　龍人
電報が來て首腦部は活氣づき　鐵花人
生還は期せず根據地後にして　舞吉
ポケットに遺書突ッ込んで決死隊　叮紅
ポケットの煙草一本折れたまゝ　一湖
ポケットから何んと百圓札を出し　將雄
ポケットを付けて仕上る割烹着　嘉夫
水平線戰さがあると思はれず　鐵花人
水平線日の出るとこが日本なり　子風
地球は此んなに丸し水平線　將雄
根據地に血染めの銃が轟つて來　快哉

仁多支部句會（島根縣）

一月三日　於一聲庵　一聲報

戰線を偲び毛糸を編む日向　談柳
戰線のたよりも春の色でくる　百合子
案内の鳴れてはならぬ事にふれ　一聲
呉服屋の店から街は春になり　同
再會を誓ふ波止場は雨となり　早苗
牧場の果のんびりと春がくる　同
また春が來た病床の髯を剃り　同
妹の方へ毛糸を着せてやり　雅舟

阪大川柳會（大阪）

方正氏歡送句會
一月二十七日　利生報

油斷したも弱める頃は破滅なり　筑川
油斷がならぬとは伜のことであり　栞
油斷めさるなと臨病の方が云ひ　同
米英に油斷をさせる風となり　春巢
油斷にあらず實力の相違なり　同
へば將棋さそひの隙と氣がつかず　柳秀
こんな歩が命とりとは知らなんだ　利生
斥候は敵の油斷を見て驚り　同
小敵とあなどり白は石を投げ　同
星軍の秘策も知らず踊つてる　同
御油斷が過ぎたと殿へ讓遜し　栞
栞轉へ雀も軒へ祝ひに來　正甫
轉任へ恩給を言ふ年となり　楠水
栞轉へふる緣談も顧みず　楠水
栞轉に手腕力量自信あり　同
轉任の當分アパートから通ひ　たけを
轉任へ何も知らずにほめはやし　同
御着任新聞記者に包圍され　山彦
御着任町會長も伺候する　同
初めての赴任師の顔友の顔　方正
轉任を淋しう云ふは情人であり　同
轉任は目と鼻の所また飲まう　同
栞轉の荷物の中に犬も居る　春巢
轉任はいろはのいから出直す氣　同
飛行機で來て轉任はもう叱り　同
栞轉と云はれ左遷とも云はれ　同
栞轉の辭令女房に拜ませる　同
栞轉の藝者にもてる顔でなし　利生
栞轉のいよ〳〵見せる腕のさへ　同
栞轉の寫眞地方版にはのらず　同
栞轉へ醫長の椅子の掛け心地　同
慰勞金の高も云はれて御栞轉　同
この栞轉で次は誠といふ　栞
赴任の地妻の從兄がゐるといふ　同
轉任のもう碁敵が出來て居り　同
惜まれて輝く職へお旅立ち　筑川
轉任に妻妻らしい希望あり　栞
釣糸の栞しみもあり轉任す　同
轉任の隣へ委す休閑地　同
轉任の挨拶ハワイ戰より初晩　同
轉任は妻の故郷へ近くなり　同
栞轉はたゞ呑んで呉れ〳〵　柳秀
栞轉の辭令女給も知つて居り　同
栞轉をよろこんで呉れ物を呉れ　同
栞轉はその盃を持て餘し　同
一列車早く家族は轉任し　路生
轉任は青森行きに乘ると云ふ　同
女房だけ左遷であるを知つてゐる　同
あと足で砂かけるやう轉任し　同
栞轉は方言で土地ほめて發ち　春巢
栞轉は父、子は轉校を又さゝれ　同
烏でも啼きまつしやろと轉任し　路生
栞轉はしても獨身つゞける氣　路郎
轉任へあの妓の祝などもあり　同
栞轉に少々奢る氣にもなり　同

松坂倶樂部川柳會（大阪）

一月十一日　白面人報

祖父と祖母硝子寫眞で見るばかり　石鹿
擊沈の寫眞を座り直して見　白面人
告別式の寫眞は銅子の撮つたもの　孤篷
生還を期せぬ寫眞と今判り　生々庵
寫眞機を向けは女中チョット逃げ　曹天
生活苦丸出しといふ寫眞見せ　路郎
電送の煙を少し書き足して　同
立志傳おちのおけしの寫眞も出　同
小男の疊ひきずる大掃除　久行
小男の案外物を知つてゐる　アート
軍靴になつて小男出征し　石鹿
小村侯の目方にふれる外交史　孤篷
教壇に立つ小男のちとあはれ　同
チョコなんとあれが總裁さんだと　生々庵
小男の網棚ボーイ氣をきかせ　同
小男の借り着袖まくりしてよばれ　同
小男に奥さん草履でお伴する　曹天
小男で机があまる支配人　同
主任會議小男ながら敗けて居ず　同
小男で給仕代りをまだつとめ　同
珍客がわけのわからぬ土產くれ　石鹿
珍客が來たのに軍役まだ去なず　孤篷
珍客と晝酒のないふぐを食ひ　生々庵
珍客が子澤山丈ほめて呉れ　同
珍客を泊めてあぐる日無心され　曹天
珍客に赤ん坊までおこして來　同

一月十八日

清貧の見本の樣な老教師　石鹿
和服着てゐても教師と知れちまひ　白面人
女教師の聲もゆかいな鳩ポッポ　恒明
年とつたわいと教師は眼鏡替へ　同
御參考までと教師は輕くにげ　同
二日目の教師はチョークばかり折り　生々庵
教師今裁きの樣な瞳受け　同
先生もやつぱり試驗勉强し　中村
申告書教師キッチリ讀んで書き　孤篷
未亡人教師となつて育てる氣　曹天
二次會に教師も隅に置けぬ藝　同
戀人の寫眞もろとも捕虜となり　石鹿
捕虜の手記皇軍の慈悲にふれ　同
オハヨーをいはれて捕虜もにこまれず　孤篷
口きかぬ捕虜へいよ〳〵腹が立ち　恒明
日本語を知つてる捕虜が又呼ばれ　同
日本へ二度目は捕虜の委で來　同
丸腰でさもの〳〵と捕虜の顔　生々庵
祖國亡び捕虜は己れを全ふし　同
觀光團みたいに捕虜の船が着き　同
捕虜になりまた身だしなみ忘れ衆　同
捕虜の群道化役者と云つたふう　中村
捕虜なんかなつて呉れなと母念じ　曹天
差し延べる捕虜の握手は冷まかり　同

善通寺

捕虜で來てまだ月給を云つてゐる　同
往診を未つ子連れて出迎へる　孤篷

空腹を云はず往診お茶を飲み　同
御見舞と呼ぶ蠶一家立ち上り　中村
基敵をいつち最後に往診し　恒明
往診が代理であつて案じられ　同
往診の氣になる事を云ひ殘し　白面人
父親が出て往診を迎へ入れ　同
次を急くやうに往診すぐに清み　同
往診の留守に戸板でかつぎ込み　同
手を洗ふときに往診安堵させ　同
往診を待つ間夫婦で一寸揉め　同
往診の埋め合せらしい注射され　生々庵
往診を斷る術を子が覺え　同
お賴みもせぬ來診に面喰ひ　同
往診と云ふ事にしたニュース館　同
往診の電話お茶屋にゐるものを　路郎

有恒倶樂部川柳會（大阪）

一月十五日　銳々報

掛取りを盜み聞きする兩隣　青美
兩隣とも訓練に夫人出ず　波夢造
寄附帳に兩隣のを探してみ　同
月給も知つて社宅の兩隣　銳々
兩隣同じレコードかけてゐる　同
兩隣から氣にされる咳　路郎
鶏の糞にホト〳〵困る兩隣　同
兩隣又煙突の注意する　同
奥さんの留守と氣がつく兩隣　同
散髪へ來て本當に成る噂　至藝瑠
儲けてる噂へエヘヘと笑つとき　波夢造
株トンビ目を三角にデマ飛ばし　青美
繼頭やると猫までよそへほめ廻す　同
家建てりや闇でもやつたかと言ふ　同
世評など女社長の思はざる　銳々
デマと知りつゝパトロン氣にあり　同
新聞辭令その後訪問記者も來ず　銳々
屏風から生まれ屏風へ終る世や　青美
金屏風殘し諍りを捨てずゐる　銳々
金屏風眺めて火鉢圓う撫で　同
御燈明の靜かにゆれて銀屏風　同
終止符を醫者は屏風の陰でうつ　亞蒼海
落ぶれて見て邪魔になる金屏風　同
金屏風たゝかれたまゝ賣りにけり　同

一月二十二日

惡友で困り者だとついて行き　亞蒼海
今更に交際などゝ娘云ひ　行三
交際家だつた葬儀の賑やかさ　波夢造
曖昧な支出交際費としとき　同
外交で丸めて來ると自信あり　銳々
博士より交際家として夫人の名　同
おつきあひだけといふ酒かなり　同
交際でどうさせまんねと御寮さん　同
わてらかて交際はあり女事務　青美
ボーカー以來彈丸つまるか五十六氏　同
交際は岡目八目から讀き　同
つきあひを信じぬ妻にしてしまひ　路郎
交際も切符の話食ふ話　同
あの年でスキーにもゆく交際家　同
物々交換交際の廣さ見せ　同
ベルリンでも味噌汁を喰べに行き　青美
とうとさは切符になつてわかる味噌　同
うすい味噌汁ソレ修業中修業中　波夢造
泊り客先づ味噌汁を褒めかゝり　同
鬚が伸び味噌汁の味わかりけり　銳々
路次の奥に味噌汁の朝を樂しむと　同
責任へ少年兵のひたむきな　青美
何もせぬ社長はみなの責めを負ふ　同
責任を問ふと末席から一人　波夢造
不時着陸最後の責は火を放ち　同
紹介狀頼まれたゞけとも書けず　銳々
責任のないのが末座から喚き　同
責任の輕い一と口乘つておき　同

ぎんりん句會（松江）

一月十五日　於遞信診療所　町紅報

建艦の響はおそし眞珠灣　莞路
軍艦皆んな東郷さんが居そうなり　十詩
軍艦マーチ臨時ニュースのすんだあと　小菊
軍艦に乘つたとこから夢が覺め　早苗
五五三思ひ知らせる秋が來た　靜朗
子の遊ぶ職場に山の鉋屑　七星
邪魔すれば倒すだけなり戰車征く　快哉
上陸の第一信は椰子の陰　松江子
寒稽古やつぱり母に起される　快哉
常會のモンペはお茶を汲む役目　遞兒
モンペ隊一二三四五六異狀なし　祥月
買物の列のモンペはすばしこい　莞路
表彰を受けるモンペは粗末なり　町紅
モンペに仕よか布團の裏にしよか　英兒
賴母しく輸送船團取り圍み　將雄
進水式日本の强さ一つ增え　一聲
風邪でないマスク職場の中に立ち　遞兒

警察病院川柳會（大阪）

二月五日　正柳報

ルンペンは何所吹く風の切符制　正朗
未だ着れるものが出て來る切符制　同
價格より點を聞いてる切符制　同
米よりも切符の方が大事です　好平
切符制親の分まで着る積り　浩
切符制老輔の看板吹き飛ばす　茂一朗
買溜も切符制には手も出ず　杏華
點數は子供の方がよく覺え　柳一
切符制その身輕さが親しまれ　湧三
一坪の農園だつて補助切符　同
百點を生かす工夫を子が敎へ　同
ボーナスを貰つた時は切符無く　久郎
借せ貸さぬ切符で揉める姉妹　同
521點が減つてく淋しさよ　道朗
切符制獨逸の事でなかつたか　同
これ僕の切符やと子も貰さぬなり　正柳
猿股を切符忘れて買ひそこね　同
寶物のやうに切符をしまつとき　同
切符制になつても矢張り並んでる　吉郎
五荷七荷昔の夢よ切符制　同
切符制になつて家計簿赤字が出　素舟
點數で潮碧みせられるよい衣裳　青柳

非特異性全免疫元
ムニン
コメツト
本劑は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。
（適應症抜萃）
流感、各種肺炎、肺（腺）膿炎、肺結核炎、中耳炎、產褥熱、其他各科、急性、慢性、炎衝性、傳染性、敗血性、並に化膿性諸疾患に對し廣汎に渉り著効を奏す。
（特長）
注射無痛、副作用絶無、用法簡單、奏効迅速、價格至廉。
（包裝）
三cc瓶入　三〇〇〇錢
三cc管入　三〇〇〇錢
一cc管入　一〇〇〇錢
一cc管入　一〇〇〇錢
發賣元　株式會社黒田藥品商會
大阪・東京
一文獨歩一

総義歯を外しほんとの年齢になり　同
入歯して確かに十は若がへり　道朗
洗面の度に義歯を忘れて來　素舟
歯楊子で磨いてゐる義歯なり　吉郎
世をすねたやうに義歯を置いて。　正朗
ガラ〳〵と笑へば入歯獅子に見え　青柳
朝まだき訪へば義歯を磨くとこ　正柳
義歯だけが只全盛の遺物なり　雨聲
寫眞だつかと慌てゝ義歯はめて。　吉郎
俺に遠慮せずにと父の總入歯　路郎
摺餌とは儚なし入歯して以來　同

長男へ親の期待ははずれたり　正朗
鯉幟程に長男出世せず　道朗
長男は長男らしく死を悼み　眞砂子
長男坊新服毎に撮される　素舟
長男の嫁か親御の嫁なのか　同
惣領の取柄はしまつたけのこと　正朗
惣領へまだ配給の菓子が來る　湧三
大東亞長子のねむる土はどこ　同
長男のスローモーションもう知れ。　路郎
もう父と同じ猿股同じ足袋　同
電擊戰町の名前も覺へかね　青柳

南方へ行き度いと云ふ丙種なり　道朗
斷交とおこがましくも南米が　久郎
世は陶器竹の時代となりました　同
名譽の捕虜とは勝手なことを言ふ　正朗
十八の夢かグリーンの鞄下げ　湧三
大晦日中途半端な畫の内　五郎
散髪屋頭頭の大晦日　久郎
二の太刀もやつとこ逃げた大晦日　正朗
大晦日船は祖國へ急ぐなり　湧三
今日限り三十代も御別れか　道朗

徐州川柳會（徐州）

一月廿五日　於市川公館

手袋のまゝ運ばれる露天茶屋　ひろし報
おもむろに手袋をとる令夫人　古泉
炭取るに軍手でつかむ女房なり　大同
手袋をして一日を寒がらせ　召公
手袋とハンドバックを派手に置き　一川
寒稽古道具を肩に素足なり　寛延
南洋は青春の夢をのせてくる　ひろし
南洋の資源がほゝ笑む勝ち戰　多々良
南洋諸島悉く貢ひ受け候　興亞
南海の孤島日本の持つところ　昇
桂子

生活を明るく
人生行路の好伴侶

麻生路郎著

新川柳評釋

發行所　不朽洞

堺市出島海岸通二丁目二一番地

振替大阪三〇三九二番

價　一・八〇
〒　〇・〇六

但シ海外註文は實費送料加算を乞ふ

敬神崇祖

伊勢大神宮、熱田神宮、橿原神宮、神武天皇御陵をはじめ奉り數多くの御陵墓、枚岡神社、奈良春日神社、石上神宮、大和神社、大神神社、吉野神宮、丹生川上神社（上・中・下社）、談山神社等の官幣社ほか御由緒深き神社への光榮ある參拜路であります

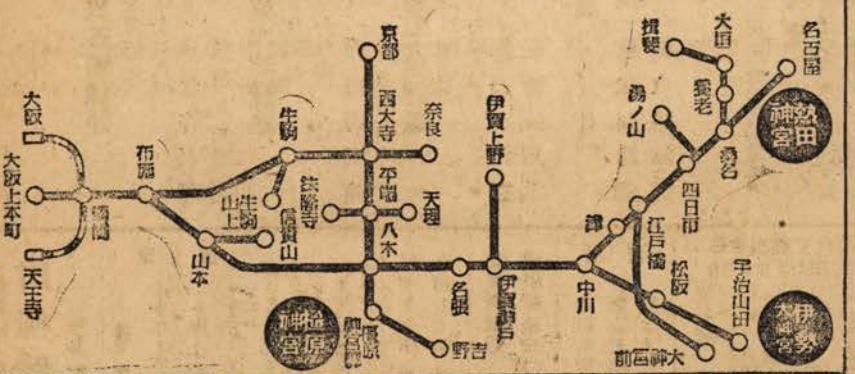
心身錬成

神武天皇大和御平定の聖蹟をはじめ、飛鳥奈良朝時代の文化を物語る遺蹟下りては吉野朝幾多忠臣の史蹟、奈良、吉野、多武峯、室生寺、赤目四十八瀧、香落渓、鷲老等の名勝に一般同鍛練道場としてのハイキングコースがあります

信貴生駒縦走・枚岡公園・生駒山上・攝河泉展望コース、平城史蹟めぐり、飛鳥史蹟めぐり、多武峯より石舞台・岡寺へ、三輪より石上神宮・天理へ、赤目四十八瀧より香落渓へ、その他奈良、吉野、生駒山脈を中心として數多くの優秀コースがあります

重要交通路

大軌と參急電鐵とが合併して參宮路線に四二八粁、これに直營バス及傍系の電車バスを加ふる時は一千粁を超え、大阪奈良三重愛知岐阜の一府四縣に跨り交通産業に緊密な關係を有する重要な任務を擔うてゐます



關西急行鐵道

（旧名大軌參急電鐵）

★★ 社關係の人々 ★★

主幹

麻生路郎

賛助員

池澤樂居　長谷川一徹　大道弘雄　岡本一平　片岡直方　笠原路生　嘉納純　田中辰二　長崎柳秀　長岡半太郎　長野晴濱　藤村作　藤本夘之助　顯原退藏　淺田一　末弘巖太郎　谷脇素文　高尾亮雄　生方敏郎　篭田銀波樓　山本雨迷　安川久留美　前田五健　柴谷宰二郎　篠原春雨　蛭子省二　藤里好古　森東魚　小畑自有渓　古川風竹　前山北海　古川蹴花麗　岩崎山石　藤井友郎　米本貴志子　内藤章一郎　三輪晩翠　水谷鮎美　大坂形水　田中雨月　平佐平三　橋本波夢造　藤岡至藝瑠　西川青美　黒川紫香　丸尾潮花　橋双虎　岩崎松代　酒井斗風　北川春巣　布施筑川　小林橙舍　尾崎方正　佐竹香附子　押谷たけを　櫻川不水　西尾柔　田中風葉　田中銑人　濱田久米雄　好崎申仙　杉原大研子　菊澤小松園　魚住滿潮　清水友帆　清水史路　清水白柳子　西川愁水　中内翠芳　多田市多樓　濱田賢次　大森風來子　鈴木九坡　逸見灯竿　石原伯峯　岡田某人　岩崎山石　夷一笑　積山九天　鹿　矢野赫堂　月原宵明　高田抱逸　篠山籌彦　國弘半休　岩崎水虹　阿萬萬的　谷川綠風　小林文月　酒井美知夫　飯尾寄與史　小川恒明　野口柳太　渕玲之介　津路紅多呂　河野夜王　德永雅美　谷口綠葉　武部香林坊　上田翠光

不朽洞會員

橋本綠雨　高橋かほる　福田山雨樓　西田艸樂　永田里十九　奥村丹路　岩崎柳路　寺井鋭々　大西八歩　高澤一渓　戸田孤蓬　石井白面人　川出美根子　中島生々庵　戸倉普天　姫田夕鐘　村松夢裡　市場泛食子　吉田水車　妹尾八九滿　須崎豆秋　春元紀太　宮岡白峰　石曾根民郎　中西おさむ　原史風　正本水客

★

客員

鳥山一歩　沖野岩三郎　大島濤明　大谷五花村　亀井晨修　川村花菱　米村あん馬　田村孝之介

支部と幹事

道頓堀支部(大阪)萬よし　函館支部(函館)晨修　梅田支部(大阪)鮎美　天王寺支部(大阪)八九滿　鶴町支部(大阪)双虎　御池橋支部(大阪)夢裡　松江支部(松江)將雄　大鐵局支部(大阪)柳太　西條支部(愛媛)英賀夫　城南支部(大阪)申仙　今治支部(今治)文庫　難川光笑會(大阪)里十九　竹原支部(廣島)芳郎　廣島支部(廣島)久米雄　豐中支部(豐中)紫香　下關支部(下關)半休　北鮮支部(羅津府)美笑　蒙疆支部(張家口)柳路　上海支部(中華)天作　鐵道病院支部(大阪)春巣　渚支部(大阪)みのる　四ッ橋支部(大阪)翠芳　布哇支部(布哇)覺花麗　堺支部(堺)角堂　岡山支部(岡山)九坡　尼崎支部(尼崎)美知夫　日和佐支部(徳島縣)賢次　三池支部(大牟田)蝶人　染料支部(愛媛縣)椋影　大洲支部(愛媛縣)小郡支部(山口縣)井蛙　熊本支部(熊本)水源　仁多支部(島根縣)一聲

募集

第十九卷 第五號課題
三月廿日締切
(十句以内)
農村　戸倉普天選
漁村　濱田久米雄選

第十九卷 第六號課題
四月廿日締切
(十句以内)
釘　西田艸樂選
獨身　多田市多樓選

第十九卷 第七號課題
五月廿日締切
(十句以内)
占領　姫田夕鐘選
硯　長野文庫選

毎號募集 (毎月五日締切)

近作柳樽(雜吟)(廿句)　麻生路郎選
川柳塔　麻生路郎選
同舟近詠
各地柳壇 (會報)
文章 (評論研究感想吟行漫文漫畫)

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の原稿紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。
▲「近作柳樽」は全作家の雜吟を募る
▲「川柳塔」への投句は不朽洞會員に限る。
▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事。
▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。
▲書體はなるべく楷書(川柳雜誌原稿)と封筒に朱記の事。
▲締切は嚴守されたし。
▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

規格判B列5號
川柳雜誌 第十九卷 第三號
毎月一回一日發行

定價
一冊 ㊍ 金三〇錢 (送料一錢)
半ヶ年・六冊 金一圓八十錢 (送料六錢)
一ヶ年・十二冊 金三圓六十錢 (送料十二錢)
外國送本には海外郵送料實費の加算を乞ふ
御註文はすべて前金で願ひます。振替(大阪七五〇五〇)又は小爲替を御利用願ひます。御註文は何月號よりと御指示願ひます。轉居又は改號等の節は舊新併記の事。

昭和十七年二月廿五日印刷
昭和十七年三月一日發行

禁無斷轉載　本誌の刊行は有保證新聞紙法に據る

廣告
本誌廣告に御用の節は川柳雜誌社廣告部へ御一報下さいますやう。

日本出版文化協會會員 五八〇四壹壹號
發行所 川柳雜誌社
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地(昭和ビル)
振替(大阪七五〇五〇)
編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎
大阪市西區江戸堀上通二丁目四六番地
電話土佐堀 三三三三番 八一六六四番
東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元 日本出版配給株式會社

★毎號、戰線の勇士に送られたい方は部隊名をお示しの上本社宛に御申込み下されば郵税を奉仕して直接發送致します。

送本者名 住所 氏名

ルービヒサール

大日本麦酒株式會社

含有滋味が
もたらす
元氣

愛飲家に
確認さる

ガラス壜代用 紙容器

金屬代用紙罐
紙コップ

丸形・角形・小判形・組立式各種・藥品・食料品・菓子等の容器として最適

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
二葉屋商店
電話事務所用 天下茶屋 五八〇二番 五八〇三番
工場用 同 五八〇四番

東口 スピーザ

ワイシャツ
婦人服地
其の他

大阪市北浜二丁目 片倉ビル
電話北浜(23)六六三六番(4)

安産のために

姙娠としての大切な責任はカルシュームを補給して諸病を防ぎ、子宮の收縮を容易ならしめ「安産」へ導くことにあります。

ワダカルシューム錠

大阪道修町 和田卯助商店

樹林醫學博士
片瀨醫學博士 推奬
監査

片瀨醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

SENRYU ZASSHI No・218
Published monthly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十二年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年二月廿五日印刷納本・昭和十七年三月一日發行

川柳雜誌 第二一八號 ㊞ 定價金三〇錢 送料壹錢

感冒の予防と治療に

テラポール錠

感冒
中耳炎
扁桃腺炎
蓄膿症

各種の化膿菌、流行性感冒菌、淋菌等生体内に潜入して病源となる惡性細菌を確實に撲滅し、化膿性皮膚疾患、扁桃腺炎、感冒、中耳炎、蓄膿症、齒槽膿漏、齒齦炎、丹毒、敗血症、膀胱炎、急性慢性の淋疾等を最も短期間に治療せしむる新發見の化學療法——本邦ズルフオンアミド劑の始祖たる榮譽と卓越せる技術による最高の純度とを以て全國醫學界に信認せらるゝ第一製藥のテラポール

六錠・二〇錠・一〇〇錠

製造元
第一製藥株式會社
東京日本橋區江戸橋
大阪東區道修町